いつかはエコに

都々古 さぴ

毎朝毎朝通っているのに、このドキドキ感には一向に慣れることがなかった。
通勤時に賑わう小さなパン屋さん「コパンダパン」で、私は今日もどれにしようか迷っていた…というのはほぼ嘘で、中央のテーブルで焼きたてパンを並べている彼に見惚れていたのだった。

彼…行里(ゆくり)さんは私と同い年か少し年上の背の高い男性だ。一見したところ華奢だけれども、物腰の柔らかさと眩しい笑顔のためか、接客態度は他のスタッフよりもズバ抜けており、私の中ではこのパン屋さんのアイドル的存在とでも言うべき存在だった。
彼は綺麗にパンを並べ終えると、
「あんぱん焼き上がりました〜いかがですか〜」
にこやかに呼びかけていた。
その爽やかすぎる笑顔にときめいた私だったが、浮ついた表情を悟られぬように、いつも買っている一番安い百円のクロワッサンを一つトレイに乗せるとそそくさとレジに向かった。
運の良いことにレジ担当も彼だった。
「いらっしゃいませ。クロワッサンが一点で百円です」
私は百円玉とスタンプカードをポンとカウンターに置いた。彼はパンを手際よくビニール袋に入れると手提げ用の紙袋を広げようとしてくれていた。
「あ、そのままでいいです」
慌てて止めると、
「そうでしたね…いつも買っていただいてるのにすみません」
手早く紙袋をたたんだ。
（ああ、覚えてくれてるんや）
私は一人で感動しかけたが、朝の常連客なんて私以外にもたくさんいるから、そのうちの一人として覚えてくれていたんだろう。
「クロワッサン好きなんですね」
「え、ああ、はい…」
あなたに会うための口実なんです、なんて本音口に出せるわけがなかったので、曖昧に頷いてしまった。
彼は両手でパンを差し出してくれた。私は右手で受け取ると、常備している緑のエコバッグに入れた。
「レシートとスタンプカードのお返しです」
カードとレシートを受け取った私は顔を上げた。
「ありがとうございました」
その浄化されるような笑顔はずっと脳裏に焼き付けときたいくらいだった。
こんなところで油を売っていては電車に乗り遅れるので、財布につり銭を放り込んで早々と店を出ることにした。
リンリーン！
ドアのベルが鳴り、ものすごい勢いで制服姿の女の子が店に入って来た。
彼女は一直線にレジに向かっていった。
「行里さん！おはようございます！」
「おはよう、朱美ちゃん」
どうやら二人は知り合いらしかった。
朱美ちゃんは、背中まで伸びた髪の毛の先を、手でくるくるといじりながらレジに身を乗り出した。

「今日は忙しいんですか？」
「う〜ん、バレンタイン前だからねえ」
「そっかあ、残念。あ、でもでもっ！人手が足りなかったらいつでも言ってくださいね！私お手伝いしますから！」
　彼女は他のお客さんのことなど全く目に入っていないようで、行里さんだけをまっすぐ見つめていた。
「ありがとう。ごめんね、お客さんが待ってるからそこ空けてもらえないかな？」
　彼はやんわりと彼女を諭した。
「あっ！ごめんなさい！じゃあ、また明日！」
「気をつけて行ってらっしゃい」
　朱美ちゃんは風のごとく去っていった。
　行里さんは穏やかな表情のまま接客を続けていた。
（なんやったんやろ、あのコ…）
　私はポカンとしつつ、今度こそ店を出た。

　目覚めて数時間という太陽の光を背に受けて私は歩いていた。道路を走る車、歩道を行き交う人々。今日は二度と来ないというけれど、明日も明後日もほぼ変わらない毎日。
　なんにもおかしくはない。なんにも寂しくもない。
　コンビニ袋を片手にさげて小走りで通り過ぎるおじさん。
（お、あの人いつも緑茶やのに今日はウーロン茶なんやな）
　お尻あたりまである長い黒髪をたなびかせて進んでいる女の人。
（珍しい。いつもはポニーテールやのに）
　こんな人間観察も日課の一つにすぎなかった。
　二月に入り、そろそろ春の兆しを感じても良い頃のはずなのに、まだまだ冬らしさは続いていた。
　けれどもここのところは暖かい日が続いていたので、布団かぶり症候群からは脱出できていた。
　十分ほどして駅の出入口に着いた私は地下へと繋がる階段を下りて行った。
階下からぴゅーと冷たい風が吹き抜ける。一週間程前に肩にぎりぎりつかないあたりの長さまで髪を切ってしまったので、首元がスースーして寒かった。
　私はオレンジ色のマフラーを巻き直し首をすくめてさっさと改札に向かった。
　人の群れがわらわらとこっちに押し寄せてきていた。
　ちょうど反対行きの電車が来たとこらしい。私は人にぶつからぬように改札を素早く通り抜けた。
　群れがいなくなると構内はシーンと静まり返った。そして、また四方から一人また一人と階段を下りてきては改札を通り抜け、瞬く間に雑音数が跳ね上がった。
　通勤ラッシュというのはだいたいどこでもこんなものだろう。
　人の流れよりやや遅れて私はホームへの階段を下りて行った。ここの階段はやたら深い。改札からホームまで五十段もあるが、大抵の人々は段数など気にも留めず、ただ流れに沿って上り下りするだけだ。
　私も波と共に動いている時は時間に追われ、階段が何段かということなんて頭の片隅に置き忘れている。
「電車が参ります。黄色い線の内側までお下がりください！」
（あ、急ごう）
　駅員さんのアナウンスで、ぼやっとしていた私はコンクリートの塊を一気に下りようとした。その途端、定期入れを落としてしまった。
　根付鈴のついた布製定期入れはスポーン！と勢いよく階段下に落下した。
　タタタタ…私は定期入れに向かって一直線に駆けて行こうとしたが、電車から降りてきた人の波が前から押し寄せてきて足止めされた。

（ちょっと！蹴飛ばすな！）
　定期入れは通勤通学客の足に蹴られ踏まれを繰り返し、最終的にホームの反対側にまで滑って行き見えなくなってしまった。
（こりゃ間に合わんな）
　プシューっとドアが閉まる音ともに私は脱力感を抱いた。慌てるとロクなことがないなと肝に銘じつつ定期入れの行方を追った。
（どこいったかな…あ、あそこか！）
　探し物はホームの内側に立っている男の人の足元に流れ着いていた。
　小走りで駆け寄っていくと、その人は足音に気づいたのか右手を伸ばして拾ってくれた。
「どうぞ」
「すみません、ありがとうございます…」
　黒の手袋は防寒具としては薄い素材だった。定期入れを受け取った私は顔を見上げた。
　歳は二十代後半くらいだろうか。黒革のジャケットを羽織り、カーキっぽいジーンズを履いていた。首には黒と白のタータンチェック柄マフラーを二重に巻いていた。ここらでは見たことないような端整な顔立ちの人だった。そのせいか思わず身が竦んだ。
　一瞬、男の人の顔がこわばった。
　何か変なものでも付いていたのかと焦ったが、彼はすぐさま元の表情に戻った。そして、
「エコ…」
　と呟いた。
「？」
　私は目を見張って手に提げていたカバンを見た。
「エコバックが何か？」
「いいや、何でもない」
　彼は首を横に振るとそのままさっと階段を上がっていってしまった。
　たまに「レジ袋やめてエコバック使ってます！」というのを嫌う人がいるというが、あのお兄さんもそうだのだろうか？見た目からはそういう感じではない気がしたけれど。
　いや、世間には一体どんな人がいるかどうかはわからない。今だって、この駅内に入る人すべてを把握しているわけではない。
　私は特に疑問も持たず上りホームに戻っていった。

　一番で部屋に入るのはもう慣れたものだが、朝の冷気はまだ篭ったままだった。私は部屋内をぐるりと見渡した。棚には何の変哲もない収納ボックスたちが整然と並んでいた。
　私が勤める「ハコツクール株式会社」では、収納用品や日用雑貨を製造販売している。多々ある部署の中で私は商品企画部に所属しており、新商品企画の提案やデザイン等が私の主な仕事内容だ。
「おはようございます」
「おはよ、歩智（ぽち）。今日はいちだんと冷えるねえ…」
「そうですね…」
　エアコンをつけて自分のパソコンに電源を入れた頃、しろま先輩がやって来た。
「ここ、足が冷えるんだよね～」
　先輩は奥のロッカーに上着と荷物を置きに行った。
「ストーブがあるといいんですけど」
「そこまでお金かけてくれないだろうね」
　苦笑いすると先輩は自分の席に戻った。
　先輩の本日のファッションは、ベージュのジャケットに下は黒っぽいデニム、ショートブーツをインしていた。
（細いなあ…）
　宵蛍（よいほたる）しろまさんは私よりも二つ歳上の優しくてスマートな先輩である。

最近流行りのブーツインだが、足が細い人でないと似合わない。しかも、ただ細いだけではなくて、ほどほどに肉付きが良く、そこそこ運動神経も良さそうな体型かつ見た目でないと似合わないと勝手に考えていた。女の子ならまだしも、男の人でこれだけブーツインが似合う人は近辺になかなか見かけない。

先輩の場合は似合うとか通り越していて、普段履きの一部になっているかのように自然とスタイルが出来上がっていた。そんな容貌と気さくな性格なので社内にファンも何人かいるとかいう噂だ。

ファンといえば、今朝パン屋さんで見かけたあの少女も行里さんのファンの一人なのだろう。

（バレンタインは稼ぎ時かな…）

近頃は洋菓子店だけでなく、あらゆる食べ物屋さんで季節のイベントとしてバレンタインも取り入れるところも多くなったようで、この時期は可愛くラッピングされた、やたら甘そうなお菓子がズラリと陳列された売り場をよく目にする。

（彼は毎年ようけもらってるんやろなあ〜）

他の異性達からチョコを貰って表面上は喜んでいる彼の姿を想像するとせつなくなってきた。彼ならば本心では拒否しても、義理で受け取ってくれそうな予感がしたからだ。

私はふうと溜息をついて何となくカレンダーに視線をやった。

「どうしたの？」

「あと四日でバレンタインやなあと」

「もうそんな時期だっけ」

先輩はあまり興味なさそうな面持ちだった。

「何か予定あるの？」

「あったら溜息なんかついてませんよ」

「そっか。バレンタインだからって世間が騒がしくなるだけで、大抵の人は普段と変わらないと思うけどね」

「ですよね」

「そうそう。だから元気出して！」

「いや、そんなに落ち込んでたわけでもないんですけど…」

「そうだったの？」

先輩は目を丸くした。

何かこう作為的じゃないところがいい。この独特の天然さが心地良い環境を作っているのかもしれなかった。

私は誤魔化すように笑うと席に着き仕事の準備を始めた。

「リーダー遅いですね」

壁の時計を見上げると、針はすでに九時十分を過ぎていた。

「遅刻かな。珍しい」

先輩も首を傾げた。

リーダーは本名風渡春郎（かぜわたりはるお）という。商品企画部の企画職代表なので、私もしろま先輩も「リーダー」と呼んでいる。眉毛がハの字に垂れたちょっと頼りない中年男性である。

私達がリーダーの噂をしているとガラガラガラと何かを転がす音が聞こえてきた。

ガチャ

「おはよう！」

「おはようございます」

朝からハイテンションで入室したリーダーはいつもに増してニコニコしていた。

「それ何ですか？」

先輩が指したのは彼が持ってきた台車に乗せられた何かだった。それは白い布に覆われていた。

リーダーは鼻高々にメガネをくいっと上げた。

「いいかい？これから紹介するのは、ぼくが考えた画期的な商品だよ」
　彼は白い布をばっとめくると、ダンボールのような素材でできた人形が現れた。
「バレンタイン＆ホワイトデー限定人型収納ボックス、名付けて“ヒトボン”！」
「そのまんまやん…」
　私も先輩も唖然としていた。けれどもリーダーは燃えていた。
「その疑いの眼差しはわかるよ、わかる！でも、多機能に溢れたこの新世代の代物は爆発的ヒット間違いなしっ！」
「それ一体いくらで売るんですか？」
　先輩は手で額を抑えた。
「何と五万円！安いっ！」
「高いです…」
　すかさず突っ込んだ先輩の意見に同感だった。
　一体、何を迷ってバレンタインやホワイトデーに動きもしない不細工な人形を買う人がいるのか。
　これなら、二次元の萌えキャラのフィギュアやらを買って抱きしめているほうがずっとリアリティーがあるし、需要も高いだろう。
　奇抜な発想は素晴らしいが、現実にも目を向けるべきである、と入社一年目がとても言える立場ではなかったが、お世辞でも「絶対ヒットしますよ！」とは口に出せなかった。
　収納用品を作っている会社ではありえない。それだけショッキングな物だったのだ。
　収納の基本は、取り出しやすい、使いやすい、邪魔にならないはずなのだが、この人形はこれらの条件を満たしていない以前に論外である。
「バレンタイン＆ホワイトデープレゼントにぴったり！これでお部屋も綺麗になる！」
「…それ、商品にしてほしいって要望があったんですか？」
　先輩の三秒間の沈黙は「プレゼントにそんな邪魔になるもん置くわけねえよ」と解した。
　しかし、そこでダメ出し連続をしないのができるオトコである。
　リーダーは一段と目を輝かせた。
「いや、お客さんからは、親しみのもてるデザインの収納用品がほしいっていう希望が多くて、それを踏まえて考えたのがこれなんだ」
「親しみのもてる…デザイン、ですか」
「そうとも！一人暮らしだと帰ってきて寂しいときがあるだろう？そんな時に、コイツがいるとあったかくなる！しかも、ただの人形じゃなくて収納機能付きだから、身の回りの物も整理できて一石二鳥！」
「まあ、理由はわかりましたけど、どうやって販売するんですか？」
「む～それはええと…」
　さっきの勢いはどこへやら、急に彼は口ごもり始めた。その時点で私も先輩も気づいていた。
「そこまで考えてなかったんですね」
「…ああ、そうだとも！！」
　リーダーはぐっと拳を握り締めて開き直った。
「はじめは、こんなん売ってますよみたいな感じで…ちょい出しで売る感じで…そこで売れてきたら大々的に売ろうよ」
　すっかり白けた雰囲気に慌てた彼は人形に布を被せ、台車ごと部屋の隅っこに移動させた。
　何てぞんざいな扱いなのだろう。隅っこにだけ異様な空間ができてしまっていた。
　勤務を終えるまで私も先輩もヒトボンの話題は一切口にしなかった。

　地球温暖化が進んでいるとはいえ、冬の寒さはまだ健全だった。
時折ひゅうーと冷たい風がふきつけると身震いせずにはいられなった。
　私は晩御飯の買出しをしに、「スーパーさきわ」へ寄って行くことにした。自宅の最寄駅から徒歩五分ほどのところにあるので会社帰りにはよく利用していた。

駅傍には大きなスーパーがあるのだが、夕方時はいつも混んでいるので特売日でない限り入る気がしなかった。それに比べここのスーパーはこじんまりしていた。
午後五時から卵一パック九十八円のセールやパン半額引きをして、午後九時近くでもまだ残っているようなちょっと経営が危ぶまれるところもあるが、近所のお年寄りや私みたいな単身者にはありがたいお店だった。
会計時、私はレジ袋をもらわず、持参していた水玉模様のナイロン製エコバッグに入れてもらった。そうすると二円引いてくれるのである。
浸透し始めてきたエコバッグだが、本当にエコとは思えない。すでに何かのオマケや店頭でもらったエコバッグが溜まっていて、使い勝手が悪いのでそのまま放置という状態である。
これらのバッグの材料費がもったいなくて仕方ない。
レジ袋だって全く要らないというわけではない。使い方次第でエコバッグなんか持たなくても効果を発揮する場面もあるだろう。
別にカバンを新たに買わなくたって、押入れに眠っているトートバッグや布袋を使えばすむ話ではないか。もったいない。
…などと「ＮＯ！レジ袋、マイバッグを持ってゴミを減らしましょう」という文句を見る度に一人心の中で虚しく憤慨していた。
今日も半額の餃子とパンとネギを買って外に出ると車通りが一層激しくなっていた。
私はそのままマンションに向かって道沿いをまっすぐ歩いて行った。
スーパーを過ぎると通り沿いは少し暗くなる。早いとこ帰りたいと先を急いでいると、どこからか「ふきゅ～」という鳴き声が聞こえてきた。
視線の先にいたのは一匹の子猫だった。いや、子猫じゃなかったかもしれない。体長二十センチに満たないほどの白色の小動物がちょこんと座っていた。
そのあまりに円らな青緑色の瞳と大きなふわふわの尻尾に魅了された私はその動物の方へふらりと歩み寄った。尻尾の先はくるんと巻いていた。
（可愛いいなあ…）
私は撫でたくなったが、野生の動物にむやみに手を出すのは危ないと思い留まり、眺めておくだけにしておいた。
「ふきゅう～」
甘えるような鳴き声に女子学生のようにキュンとしてしまった。
私が更に近づこうとすると、その動物はクルリと後ろに向き走って逃げて行ってしまった。

（ああ、疲れた）
階段を七階まで上るのはきつい。その分家賃は安いけれども忘れ物をしたときは致命的だった。
日頃の運動不足を解消できる絶好の機会と思い決めた物件だったが、居住一年経とうとしていても解消されていなかった。
あれだけ早く家に帰って休みたいと思っていたのに、玄関に辿り着くと階上から周りの景色を堪能したくなってしまう。
七階とだけあって眺めは最高だった。
高層ビルについた明かりを見て、今日は残業なんかなーとか、派手なライトアップがあるとクリスマス、正月、バレンタイン、祝い事全てを兼ねるイルミネーション！とか一人妄想をめぐらせるのも悪くはなかった。
（さて、そろそろ入るか）
景色も堪能して玄関のドアのカギを開けようとした時、見慣れないものが目に飛びこんできた。
（何やろ？）
それはちょうどビルとビルの間にあった電柱。もちろん電柱が手前にある。そこに何かが立っていた。
（人？人形かな？）

暗い上に遠かったためはっきりとはわからなかったが、それは明らかに人間の形をしていた。
（あんなとこに立ってて…）
目を凝らすと、突然その人形がくるりと右に向きを変えた。そうしてぱっと飛び上がったかと思うと夜の闇に消えて行った。
（鳥じゃないよなあ…）
横向きになった時に見えた鳥の羽の形をした物体が気になった。
（疲れてるんかな）
私は何も見なかったことにしてさっさと部屋の中に入った。

翌日、いつもと何ら変わり映えの無い朝を迎えた私は、すれ違う人々を観察して通勤していた。
今日もパン屋さんに行く予定だったのだが、電車の時間ぎりぎりだったので、泣く泣く店の前を通り過ぎるだけだった。
窓越しに行里さんの清々しい笑顔が見えた。それがまた白い制服とマッチしていたものだから天にも昇る気持ちになった。「あ～もう、幸せ～」と目と心の保養ができた私はにやにやするのをこらえながら歩いていた。二十歳も過ぎたというのに、まだ恋心を抱ける自分に少し嬉しかったのかもしれない。
（ふう、間に合った）
早足で来たおかげで、電車が来るまでに何分か余裕があった。
柱付近に立っていると、首辺りに痛いくらいの視線を感じた。気のせいだろうかとゆっくり首を右にひねってみた。
（あ、昨日の人や）
間違いない。顔ははっきりと見えなかったが、マフラーを二重巻きにして結んでいる後ろ姿は、昨日定期入れを拾ってくれた男の人だった。しかし、別段私の方を見ているわけではなく、手をズボンのポケットに入れて電車が来るのを待っていた。
（クリエイティブ系っぽいなあ…）
髪の毛もいい感じに立てていたことから勝手に職業を想像していると、いつのまにか彼の姿が見えなくなっていた。
この時間の通勤族なのか。それにしては昨日初めて見かけたなあと思いつつも、乗る時間を変えるのは誰にでもあることなので不思議ではなかった。
そうこうしているうちに電車がやってきた。

「ご乗車ありがとうございました～」
一日で一番自動改札機が頑張る時間帯だった。幾多もの足音とカシャー、ピッ…という音がひっきりなしに続き、改札を出ると妙な開放感に満たされた。
通勤ラッシュとはいえ、都会ではないのでうんざりすることはなかったが、毎日毎日こんなんだと自分も社会人してるんやなあ～としみじみ感じることがあった。
会社は駅を出た東側にあった。手前がちょうど道路なので信号を渡らなければならなかった。私は赤になったばかりの信号を見ると、ゆっくりと横断歩道まで向かった。
先を歩いていたサラリーマン風のおじさんが車が来ていないのを良いことに、体をくねらせるように渡っていった。そこまで急く必要はない私はきちんと信号を守った。
ようやく信号が青になった。私はまっすぐ足を踏み出した。
今日はヒトボンを売るのか…とちょっと憂鬱な気分になっている時だった。
ププ～ッ！
（え！？）
立ち止まった私は振り返ると、正面から猛スピードで車が飛ばしてきていた。
（えっえっ？信号変わったよな？）

狼狽える私などおかまいなしに、車はみるみるうちにその距離を縮めてきた。
（はよ渡らな！）
「…いてっ！」
慌てたせいか、自分の足につまずいた。
（ぎゃあ〜っ！轢かれるぅ〜っ！！）
目前に迫った車に体が動かず、立ち上がることができなかった。私はぎゅっと目をつぶって頭を抱えた。すると突然ふわりと体が持ち上がった。
（へっ？）
気が付くと反対側の歩道に着いていた。
キキーッ！
凄まじいブレーキ音で私ははっと我に返った。
「危ねえな！！気をつけろ！」
メタボっぽいおっさんが窓から怒鳴り散らした。
（信号無視ったんアンタやろ）
私はムッとしたがぐっと堪えた。
おっさんは再びアクセルをギュワンと踏んで走り去っていた。
「大丈夫かい？」
「へ？うわあ、あ…」
突然の呼びかけに驚いて振り返ると、そこにはグレーっぽいスーツを着こなした細身の男の人が立っていた。細いストライプ模様が洗練した雰囲気を醸し出しており、藍色のネクタイには三角形をあしらったおしゃれな刺繍が入っていた。
私は状況がよく飲み込めなかったが、おそらくこの人が助けてくれたんだろうと思い、
「あの、ありがとうございました」
お辞儀をした。
「いやいや、悪いのはあの車だったんだから」
お兄さんは私を咎めることもなく笑った。マリンブルーのピアスがキラリと光った。
（この頃かっこええ人よう見かけるなあ…う〜ん、この人は会員制のバーで働いてる感じやな）
こんな細いのによく私を持ち上げたなあ…と自分の不注意の反省よりも好奇心が先立っていたがふと腕時計を見ると、もう八時四十分だった。
（まずい！）
「すみません、急ぎますので…」
私はへこへこと頭を下げた。
「ごめんね。じゃあ、気をつけて」
男の人はニッコリ笑った。
「どうもありがとうございました」
お礼を述べながら歩き始めていた私は、もう一礼すると小走りで会社に向かった。
それにしても恐ろしかった。今まで自転車で人を轢きそうになったことや、飛び出しでぶつかりそうになった経験は何度かあったが、実際に車に轢かれそうになったのは初めてだった。
あそこであのお兄さんに助けてもらえなければ確実にぽっくり逝っていただろう。
信号無視のおっさんにはまだイライラするが、自分の命が助かったありがたさのが上回っていた。お兄さんの勇気ある行動に拍手を送りたい気持ちで山々だった。

「おはようございます」
「おはよ」
横断歩道での云々のせいで先輩より遅く来てしまった。といっても、始業十分前なので時間にはまだ余裕があった。
「今日は遅かったね。電車乗り過ごしたの？」

「いえ、駅の前の横断歩道で車に轢かれそうになって」
「えっ！？大丈夫だった！？」
　先輩は慌ててこっちへ戻ってくると、私が怪我をしてないか心配顔になった。
「だ、大丈夫ですよ！危機一髪のとこで助けてもらったんです」
　私は大事ないことをアピールした。
「そうだったんだ…良かった」
　ほっと胸を撫で下ろした先輩は、デスクに置いてあったマグカップのお茶をゆっくり飲んだ。
「あんなとこ飛ばしてくる車なんて滅多にないのになあ」
「今日はたまたまついていなかっただけですよ。考え事してましたし」
「考え事？」
「ヒトボン販売のことですよ」
「ああ、あれか…どうするんだろうね」
　先輩も返答に戸惑っているようだった。この気まずい間を埋めるために私は話題を切り替えた。
「そういえば来週は三連休ですね。先輩は地元に帰らないんですか？」
「実家はあってないようなものだから」
「えっ？」
　意味深な発言に私は思わず声を上げた。
「いや、家はあるんだよ。家族もいる。だけど…」
　先輩はふと視線を逸らした。どこかしら哀し気な瞳だった。
「ある事件から完全に復旧してないんだ」
　よく内容が飲み込めなかった私は何も言えずにいると、
「さあ、仕事仕事！」
　先輩は元気よく立ち上がった。
「あ、はい！」
　私も急かされるように自分の席に着いた。

　昼休み、先輩の実家の件がどうしても気になった私は、食事から帰ってきた先輩に尋ねることにした。
「先輩」
「なあに？」
「朝の話ですけど、聞かせてもらえませんか？」
　先輩はう〜んと悩んでいたが、
「いいよ、隠すことでもないから」
　と快く返事してくれた。

「オレの田舎は芽恵(めえ)県の唖(あ)市っていうところなんだ」

「ニホンで一番短い市の名前のところですね」

「そう。五年前に合併するまでは椀端(わんたん)村といって緑豊かな地域だった。ところがある日何者かに襲撃されたんだ」
「襲撃？」
「椀端村には不思議な能力を持つ人々がいるんだ。彼らを狙った奴が村ごと滅ぼそうとした。非現実っぽいけど本当だよ」
「あ…わかってます」
　私がポカンとしていたからか先輩は念を押した。
「村の人は助かったんですよね？」
「うん。村人が何とかして奴を追い払ったよ。でも被害は大きかった」

「一人でそんなことが出来たんですか？」
「相手は人間じゃなかったんだ。後で聞いたところによると、神様の弟子で光の術を使う者だったと」
「神様の弟子が人間を襲うんか…」
　私の中の「神様とその類は人間の味方！」という先入観があっけなく崩れた。
「本当かどうかは疑わしいけど。確かなのは月為（つきため）っていう名前と「闇に生きるもの」ってことぐらいかな」
「その弟子って人間みたいだったんですか？」
「形はそうだったなあ。全身黒い布を纏ってたし、顔も殆ど隠してたからはっきりとはわからなかった」
「怖いなあ…」
「はは、大丈夫だよ」
　先輩は笑っていたが、現実にまさか予期せぬ事態に遭遇したら、いつ何時災いが己の身に降りかかるか不安になってしまうのが普通だろう。
　交通事故に遭わないかというだけでもヒヤヒヤしているのに、自分の予想をはるかに超えた存在の心配までするとなると、心臓がいくつあっても足りなかった。
　のんびり話す先輩を見ていると、逆に温厚でいられるほうが恐ろしかったので、これ以上追及するのはやめておいた。

　早く仕事が終わってルンルン気分で帰路を歩いていた…いつもなら。
　今日は違った。さっきからものすごーく後をつけられている気がしてならない。
　ちらちらと後ろを振り返ってみるが人の姿は見当たらない。
（気のせいか）
　昼間、先輩に怖い話をされたから神経質になっているだけだと思い、私は小走りで駅に向かった。
　最寄駅で電車を降り、階段を上がって改札口を出た。地上に上がると出入口付近に黒い服を来た人が佇んでいた。何気なく見上げると視線が合ってしまった。
（あ、あのお兄さん）
　最近毎朝ホームで見かけるクリエイティブ系の男の人が無言で私を見つめていた。
（むむ、むむ…）
　私は悪いこともしていないのにだんだん冷や汗が流れてきた。
（何なん？何なん？）
　特に話しかけても来られないのでその場を去ろうとすると、
「ちょっと待て」
　と声をかけられた。
　私はびくびくしながら振り返った。
「聞きたいことがある」
　彼はぶっきらぼうに言い放った。
　道案内ならそこのコンビニで聞いた方が…と言おうとしたが、多分この張り詰めた空気からして別の質問に違いなかった。
「な、なんでしょう？」
　思わず語尾が小さくなってしまったものの、動揺している素振りをあからさまにせぬよう努めた。
「エコリ様を知っているか？」
「エコリサマ？？」
　私の初耳反応に相手は二秒で解したらしい。質問が終わったことを。
「じゃあ、サピョリスは？」
「サピョリス？？」

　またも同じ反応に相手は溜息をついた。
　そんなこと言っても知らないものは知らない。もう去ってもいいかなあと思っていると、
「もっとわかりやすく言わなきゃ」
　どこからか声がした。
「え？どこ？」
　こんな至近距離から聞こえてくる声が果たしてどこから…
「わあっ！」
　姿勢を正面に戻すと、いつのまにかお兄さんの左隣に女の子が立っていた。
　見た目は私よりも三歳程上だろうか。ベージュのニットワンピースにダークブラウンのロングブーツを履き、ワンピースの上にはエスニック風のストールを羽織っていた。
「どうもはじめまして」
「は、はじめまして…」
　私も反射的に挨拶を返した。
「あたしはヨウヒ。葉っぱに陽って書くの」
　葉陽は名前の漢字まで教えてくれた。
「わたしは珠崎歩知（たまざきぽち）です」
「ポチっていうんだね。こっちはツキタメ。“お月さまに為す”だよ」
（月為、月為、どっかで聞いたような…）
「あ！」
「どうかした？」
「いえいえいえ、なんでも…」
　私は両手を振った。
（しろま先輩が言ってた月為ってこの人？いや、でも人違いってこともあるし）
　頭の中をいろいろと整理していると葉陽が口を開いた。
「信じられないかもしれないだろうけど、あたしたちは神様の使いなの」
「神様の使い？」
「そ、あたし達が仕えるのはエコリ様っていう神様の一人。月為が言ってたサピョリスってのはエコリ様が飼ってる神獣のこと」
「し、神獣…」
　またえらい幻想的な単語が出てきた。何だかだんだん二人が怪しい宗教の勧誘者に思えてきた。それを見抜いたのか葉陽はふんと鼻を鳴らした。
「すぐに信じろとは言わないけど…それより月為」
「なんだ？」
「お腹すいた」
「またか」
「今日は朝から何も食べてないんだもん」
「使いは一週間くらいで餓死しないはずだが」
「あたしは違うの！何か食べたいよ～」
　葉陽は駄々をこねる子供のように月為に当たっていた。
　彼はそれを冷静に受け止めていた。
「肉～！肉が食べたい！」
「え？肉？」
　私はぎょっとした。お空の上の人が肉食なんて想像さえしたことなかった。
「そうだ。しかも生肉でないとだめだ」
「そんなんお腹壊すやろ…」
「もう何十年も食べているから問題ない」
「んじゃあ、半額のお肉でもいいの？」
「腐っていなければ大丈夫だ」

彼は葉陽に尋ねた。彼女は泣き顔のままコクコクと頷いた。
「わかった…」
私は小走りで「スーパーさきわ」へ向かった。
何故道端で知り合ったばかりの人に生肉を提供しないといけないのか腑に落ちなかったが、彼女をあのままにしておいたら暴れ出して手が付けられなくなりそうだと、危機感回避のため止むを得まいと言い聞かせた。
今の時間帯は今日が賞味期限の生鮮品が半額になっている頃だった。
私は店に入るなり、隅っこの精肉コーナーを目指し早歩きした。予想通り細切れ牛肉が半額になっていた。少し茶色くなっているが腐ってはいないので許容範囲だろう。私はパックをサッと手に取るとすぐさま会計を済ませて彼らの所へ戻った。

「はい」
私から牛肉パックを差し出された葉陽は受け取るやいなや、ラップを豪快に引き剥がした。そして細切れ肉を一切れ摘み取ると口の中へ放り込んだ。
もぐもぐもぐ…ごくん。
「うまい！」
彼女は口を開けて笑った。
ふう～私はとりあえず安心した。彼女は残りの肉もぺろりと平らげてしまうと空っぽのトレイを私に渡した。
「ありがと。これでしばらく人を食べなくても済みそう」
私は身の毛がよだった。そんなことつゆ知らず彼女は笑顔のままだった。
「気にするな。生身の人間を食ったりはしないさ」
「そうね。牛も美味しかったし」
「肉以外のものも食べろよ」
「イヤだよ。めんどくさい」
二人のやり取りを観賞していた私はいつのまにか恐怖心が消えていた。と共に人間でないことを確信できた気がした。
「何笑ってるの？」
「あ、いや、おもしろいなあと思って」
「おもしろい？変わってるわね。んまあ、アンタは食べないから安心してよ」
彼女はカラカラと笑った。私もつられて笑うことにした。
「地上も悪くないね。いろいろコピれるし」
月為が真剣な面持ちになった。
「コピれる？」
「そ、能力をコピーするの」
葉陽はさらっと流した。
「ええっと、それはどういうふうに…」
私がどう質問すれば良いか迷っていると彼女は「あ！」と手を叩いた。
「そっか。人間ならわかんないね。人の能力をコピーするのはあたしの特技なの。例えば暗算が得意になるとか料理が上手くなるとか」
「それは便利やなあ…」
「でしょ？でも、あたしにはそんなの必要ないから、コピって試して終わりの繰り返しだね」
「へえ～」
「この頃コピれても使えないのが結構あって」
「使えへんの？」
「うん。人じゃなかったのかもね」
「人じゃない…」
事情が読み込めない私に対して、月為は何一つ表情を変えていなかった。
「使いか…」

「おそらくね。人に紛れて生活してるんだよ」
「使い？？」
「あたしや月為みたいなのと同類の者ってこと。そいつらからは能力取るの難しいの。能力高すぎるとあたしには使えないからね」
「ほほ～」
　説明してもらってもいまいちピンと来なかった。見た目が人間だというのだから当たり前だが。
「それにしても、目の前にいるのに運はとらないの？」
「取れたらこんな無駄話してないだろう」
　彼は顔をしかめた。
「何の話ですか？」
「ああ、はっぴぃ運のことだよ」
　葉陽は私も同胞であるかのように接していた。そんな単語は今初めて聞いた。
「人間が知るわけないだろう。本人も自覚してないみたいだしな」
「ははん。じゃあ説明しとかないとね。はっぴぃ運ってのはね、エコリ様が持ってた幸運のこと。それを神様になる時に地上に落としたの。その一部がアンタに宿ったってわけ。簡単なことでしょ？」
　彼女はどうだといわんばかりに得意げな顔つきになっていた。
　しかし、私には諸所に疑問が沸き起こった。
「神様になる時って？」
「そのまんまの意味じゃない」
　彼女はきょとんとしていた。
　まるで常識と言いたげな目つきだったが、神様の常識を人間が知るわけがない。
「エコリ様はもともとは一神様だった」
　補うように月為が説明を続けてくれた。
「それが今から二十年前に突然、統べる神によりエコの神に任じられた」
「エコって今流行ってる「地球を守ろう！」っていうあれ？」
「そうだ。神はそれを見越してエコリ様に人間のお守りをさせたというわけだ」
　なんだか彼の言い方は刺々しかった。気のせいだろうか。
「でも、はっぴぃ運をなんで地上に落としたん？っていうか、はっぴぃ運て何？」
「幸せをもたらす運だよ。それも確かにわかるものじゃなくて、なぜか幸せになってる。そんな運のこと」
　ご飯を食べた後だったからか、葉陽は眠たそうに欠伸をした。
「身近な例を上げればあの店だ。あそこはお前が毎日通っているからつぶれていない」
「ええっ！？そうなん！？全然気づいてなかった」
「でしょ。自分が他を幸せにしてるってことがわからない運ってことね」
「へえ…」
　私は何となくわかったようなわからないような声を出した。
　とりあえず「いつのまにか周りを良くしている」そんな能力のことだと思った。
「そういうものならエコリ様が持ってても良かったんじゃないの？」
「それは神が許さなかった…」
「どうして？」
「特定の人を幸せにしたくなかったからだよ」
　葉陽はいつのまにかちゃんと起きていた。
「人や使い達を贔屓して内乱が起こるのを恐れていたんだろう」
「あんなの、って言っちゃ悪いけど、別に何もならなかったのにね。誰かが好きだ！っていうこともなかったんだから」
「誰か好きやと何か問題あるの？」
「さあ～適当に言ってみただけ」

「適当って…」
「正確に言うとカンってやつ。好きな人がいたらその人に尽くしたいって思うのが人でも神でも使いでも一緒でしょ」
　一緒でしょて言われてもなあ…返答に困った私はクセで月為のほうを見てしまった。
「好意を持つものに運を使ってしまうと、その相手に運が渡ってしまう。歪んだ形で」
「あたしの予想当たってたじゃん」
　彼女は悦に入っていた。私はそれより気になることがあった。
「歪んだ形？」
「苦を伴わない楽だ」
「それを相手が使うとどうなるの？」
「人は堕落し、破滅の道をたどるだろうな」
「そんな…」
　淡々と語る彼の口調がまた現実的で私はぞっとした。
「気にすることないでしょ。エコリ様にそんな感じ見られなかったし」
「それもカンか？」
「オンナのカンは鋭いからね」
　彼女はふふふと笑った。
「その前に今は持ってないんだから心配してもしょうがないでしょ」
「それを取り戻そうとしているのは私達だろう？」
　鋭いツッコミに葉陽は「何よっ！」とぷうと頬を膨らませた。
　神様の使いとは思えない二人の妙なズレ感がえもいわれぬ空間を作り上げていた。
「とにかくサピョリスを目撃したらすぐに知らせてよね。このあたりうろうろしてると思うからさ」
　葉陽はグッドサインを出した。
「はい…」
　私はその場の流れに呑まれて返事をしてしまった。

　深い眠りについていた。いや、そんなことがわかるなんて眠っていないのか。意識だけはきちんとあった。まだ夜は明けていないようだった。
（夢の中？）
　たまに夢の中の記憶があるけれども、ここ数ヶ月は全くなかったものだから不思議な感覚がした。
　しくしくしく…
　どこからか泣き声が聞こえる。
　しくしくしくしく…
　その声に導かれるように私の意識は近づいた。
　今度は姿が映った。真っ白な服を着た女の子がしゃがみ込んで泣いていた。そのゆるやかな黒髪は地に着くほど長く美しかった。
「…どうしてみんな大切にしてくれないの。私が頑張ってもみんながしなきゃ変わらないのに」
　そこにすうっともう一人の影が現れた。
「どうされたんですか？」
　顔かたちはぼんやりとして見えなかったが若い男性の声だった。
　彼女は顔を上げると急いで涙を拭った。その潤んだ瞳はあどけなさを残しつつも落ち着いた雰囲気だった。
「私が悪いのはわかってます。そのせいて使い達の心が離れてしまったのも事実です。けれども運もなくなって、「人間を見守れ」なんてどうやったらできるの？もとはといえば偽善を行っている人達が悪いんじゃないの…！」
　再び彼女は唇をかみしめ顔を俯けた。

「ごめんなさい。言い過ぎてしまいました」
「あなたは間違っていないですよ」
　彼はそっと彼女の頬を撫でた。
「運を探しましょう」
「え？でも、そんなこと…」
「大丈夫です。あなたが元気になれるというのなら全力で探します」
「…ありがとう。頼みます」
　彼女は微笑んだ。
「ところで、最近あの子を見ていないのですが…」
「この間のことを深く反省しているのでしょう。悪い噂も聞きませんし。気になさる必要はないですよ」
「そう…だといいけど」
　彼女は悲しそうな声だった。
「葉陽にも可哀想なことをしてしまいました。今更悔やんでも仕方ないけれど、この頃良くないことばかり」
「今も人間は好きになれませんか？」
「人間が…というわけではありません。真面目な人間もいます。でも、どこからか悪が沸き起こり、いつも真面目に取り組んでいる者達が犠牲になるのです。そんな社会にしたのは人間でしょう。エコだエコだといって利益しか求めていない輩のために大切なものを傷つけて…」
　彼女はぎゅっと拳を握り締めていた。
「ああ、もう嫌。人間なんかみんな消えてしまえばいいのに！」
　怒りと悲しみに満ちた声は私の心に突き刺さった。
　するとまた彼女は申し訳なさそうな顔をして、
「ごめんなさい…」と彼に謝った。
　彼は無言で彼女の手をとり優しく握った。
「私はずっとあなたの味方ですから…安心してください」
　彼女はコクリと頷いた。
（ああ、よかった）
　朦朧とする頭で感じたのはそれだけだった。
　次第に二人の影は薄れてゆき、視界は再び黒の世界に包まれた。

　翌日は朝から雲一つない晴天、ぽかぽか陽気で仕事も捗っていた。
　昨日のことを思い出すと軽く頭痛がしたが今はスルーしていた。
　しろま先輩は朝から一階の撮影室で商品の写真撮り、リーダーは出張で不在、私は一人で黙々とパソコンに向かって作業をこなしていた。
　トントントン
「は～い」
　返事をするとガチャとドアが開いて杉ちゃんがひょこっと顔を出した。
「お客さんだよ」
「お客さん？」
「名前はわからないけど、スラッとしててこなれたマフラーの巻き方した男前のお兄さんだったよ」

　杉ちゃんはポニーテールを揺らしながら浮かれていた。杉ちゃんこと杉野悠子（すぎのゆうこ）は私と同期で総務の仕事をしている。彼女の説明で誰が来たのかほぼ確定した。
「わかりやすいイメージをありがと」
　私は杉ちゃんにお礼を述べると一階の応接室まで向かった。
「失礼します」

ドアを開けると見覚えのある顔が映った。
「…何か御用でしょうか」
嫌味っぽい私の台詞にも過剰反応することなく、
「調査だ」
月為は短く答えた。
「調査？」
「サピョリスがいそうな気配がした」
「ご自由にどうぞって言いたいところやけど、一応職場なのであんまり目立つことはしてもらわんほうがいいというか…」
私はごにょごにょと言い渋った。
「確かめ次第すぐに帰る」
立っていた月為は部屋から出て行こうとした。
「確かめるってどこを？」
「辺りを見てまわる」
「え、いや〜じゃあ！案内します…」
勝手に動き回られては困ると思った私は仕方なく案内係を請いに出た。彼は「頼む」と応接室から出た。
とりあえず、社内の各部署をこっそりまわり、最後に二階の突き当たりに位置する「商品企画部一課」と札が貼られた部屋に到着した。
「ここが私のいつもいるところ」
扉を手前に引いた。
「あの薄気味悪い物は何だ？」
「あれは…商品です」
入ってすぐに嫌でも目に付いたのは、リーダーが企画した例の人型収納「ヒトボン」だった。彼は台車の上に仰け反っていた。
「見た所、実用性が皆無なのだが」
「全くその通りだと思います」
一般庶民ではない彼も、この物の存在に疑問を抱いたようだった。
「リーダーが、親しみの持てる収納用品を！ってことで考えたらしいです。お腹のとこが引き出し式の収納ボックスになってるんですよ」
「動くのか？」
「いや、ロボットじゃないので」
「葉陽が入れるかもしれないな」
彼は人形をまじまじと見つめていた。
「入れる？」
「あいつの身体は存在しない」
「えっ？でも昨日ちゃんと…」
「あれは私の身体の一部を借りつつ、他人の能力を吸収して保っているものだ」
「コピるとか言ってたっけ…」
私はううむと考え込んだ。
「それでも三十分が限界だ」
「一体どうしてそんなことに？」
月為に問いかけた時だった。
ガチャ
部屋のドアが開いてしろま先輩が入ってきた。
「あれ？お客さん？」
「先輩！お疲れ様です」
先輩は部屋に入ってくるなり険しい表情になった。理由は何となく察しがついた。
彼の視線はまっすぐ月為をとらえていた。先輩は無言で彼の前まで来た。

「すみません、右手を見せてもらえませんか？」
　月為はそっとズボンのポケットから手を出した。黒い手袋に覆われた右手の薬指だけくたりと垂れていた。
「お前か、村を滅ぼしたのは…」
　先輩は月為を睨みつけた。こんな怖い顔の先輩は、私がうっかり熱々のお茶を先輩の足に引っ掛けて度叱られた時以来だった。
「そうだ」
　月為は表情を変えず先輩を見据えていた。
「今度は何を企んでいる？まさか、ここも吹き飛ばすつもりじゃないだろうな？」
「今回は別件だ」
　彼はすっと私に視線を移した。
「歩智？何かあったの？」
「その、まあ、人助けっていうか神助けっていうか…そんな感じのことです」
「話が掴めないよ…」
　先輩は呆れたかのように首を横に振った。
「あははは」
　ポリポリと頭をかいていると、窓からコンコン、コンコンと叩く音が聞こえてきた。
　コンコン
「ふきゅ～」
　コンコン
「ふきゅきゅ～」
「あ、あれ！」
　私は空飛ぶ円盤を指し示すように前方の窓を指差した。
　そこには、サピョリスがおでこをぶつけては鳴いている姿があった。
「捕まえるぞ」
　月為は窓のカギを開けてサピョリスを中へ入れた。
　下ろされたサピョリスは、ふきゅきゅと尻尾を振って踊っていた。
「何の生き物なの？」
「神様のペットらしいです」
「噛ませるなら早くしなさいよ」
　どこからともなく聞こえたこの声…葉陽だ。
「ああ、わかっている」
　月為は無邪気に走り回っているサピョリスを片手でひょいと摘み上げると私の前に出た。
「ちょっと待て。何をするかは知らないけど、さっきの話はまだ終わっていない。歩智もあんまりよくわかってないのに話にほいほい乗せられちゃダメだよ」
「はい…そうですね」
　先輩の言い分は最もだった。
　神や使いの存在は信じているにしても、はっぴぃ運とそれとは別の問題だった。
「ってなわけで、詳しい話を聞かせてもらえませんか？」
　月為は渋々リーダーのデスクにサピョリスを置くとふうと吐息を漏らした。
「昨日話したことが全てだが」
　それを言ってしまえばおしまいだった。私は会話を続けるために新たな話題を提供しようとした。
　サピョリスが「ふきゅ」と鳴いた。
「あ、噛ませるってどういうことなんですか？」
「サピョリスがはっぴぃ運の入った者の頭を噛むと、運がサピョリスに取り込まれる仕組みになっている。だからその方法でお前の中にある運を取り上げ、エコリ様に返すつもりだ」
「運び役って感じか」
「そういうこと」

　いつのまにか葉陽が出てきていた。
　先輩はわっとびっくりしていた。
「ええと、彼女も使いの人です」
「使い？」
「そ、あたし達はエコリ様の使いよ」
　葉陽は堂々と言い張った。
「神の使いだって？」
　先輩は首をふるふると横に振った。
「神の使いとあろうものが人間を脅かすなんて…信じられないよ」
　彼は再び月為を睨んだ。月為はどこか寂しげな表情だった。
「お兄さん、それはちょっとワケありだったんだよ」
　葉陽が先輩の肩をぽんと軽く叩いた。
「ワケがあったから地上を襲うなんてのはダメだけど、エコリ様の精神も不安定だったんだ」
「何があったの？」
「エコリ様はエコの神様。地上で行われている環境保護活動を見守るという役目があるの。人間がきちんとやってればエコリ様はあんなふうにはならなかったのに」
「あんなふう？」
「真面目すぎるっていうか性格が良すぎるんだよ。他の神から言われたこと守って使い達にも節制したら反乱みたいなのが起きちゃって…あたしや月為はエコリ様を守ったけど、結局統べる神に止められて、あたしは身体なくなっちゃうし、月為は力を半分にされちゃうし、ふんだりけったり…」
　葉陽はひどく感情的になっていた。
「諸悪の原因は人間の偽エコ行動。環境保護とか言いつつゴミの山は減ることないもん。そんなの神に制しろっていっても無理なこと。んまあ、エコリ様は反乱が起きたのは自分のせいだと思ってるみたいだけど。ほーんとむしゃくしゃするわ。この行き場のない憤り。
でもそこであたしは肉っていう運命の食べ物と出会えたんだけどね」
「運命の食べ物が、肉…」
　私はずっこけそうになったが、他の人物達は至極真面目な顔をしていた。
「でも月為は…」
　葉陽は言いかけて月為を見上げた。
　彼はゆっくりと瞼を開けると一歩前に進み出た。
「重大な過ちを犯してしまったと後悔している」
「……」
　しろま先輩は黙ったままだった。
「今更謝って許されることではないことは承知しているが…すまなかった」
　彼は目を伏せ徐に頭を下げた。
　しろま先輩は厳めしい顔つきだったが、目を瞑ってすぅと深呼吸した。
「その言葉が聞けて良かった。オレは過去に拘泥するのは嫌だから。あなたはこれから変わろうとしてる。だからもう、故郷を襲ったことについては自分の中に閉まっておく」
「先輩！」
「すごく胡散臭いけど見てたらわかるもん。誰かのために必死になってるって」
　先輩はにこっと笑った。いつもの穏やかな表情に戻った。
　何て器の大きい人…私は感銘を受けた。人の痛みを理解し、許すということは簡単にできるものではない。月為は人間ではないけれど、私達と同じように何かのために生きているのだ。
「さあ、話はこれくらいにして仕事しないと！」
　そして仕事熱心なのもまたしろま先輩の特徴である。
　不真面目な私はもう帰りたい気分になっていた。

「あれ？サピョリスは？」
「リーダーの机に…」
　葉陽は机の上中下、引き出しに至るまで隅々を見渡したが、サピョリスはどこにもいなかった。
「逃げられたな」
　月為は窓の外を見た。
「え～っ！またあ！？めんどくさ…」
　葉陽はへなへなと床に倒れこんだ。
「こんなことしてる暇ないよね」
　彼女はムクリと起き上がった。
「行くか」
「そうね。ではお邪魔しました～」
　先に葉陽が部屋から出て行った。月為もその後を着いていくかと思いきや、ドアの前でピタリと止まった。
「ありがとう」
　振り向きざまに彼は照れ臭そうに呟き部屋を後にした。

　都会から外れた場所だというのに小洒落たカフェがあった。店名は「キュイモス」
オープンテラス席もいくつかあったが、さすがにこの寒さの中では外に座っているのは二人だけだった。
　カフェか…変わりない帰路の光景。一服する暇があったら早く帰って寝っ転がりたいと、通り過ぎようとして足を止めた。
（あ、あのお兄さん…）
　二人のうちの一人が昨日横断歩道で助けてくれた男の人だった。あの自然な盛り髪は間違いなかった。テーブルの上には資料っぽい紙が何枚も並べられていて、本人は分厚い本を片手にカップの飲み物をゆっくりと飲んでいた。
　おしゃれな人がおしゃれなカフェか。似合うなあ。何飲んでるんやろ。アメリカン？エスプレッソ？それともカプチーノ？
　勝手に妄想を膨らませていると、ちらっとこちらを見たお兄さんと視線が合った。
（気づかれた…）
　彼はにこりと微笑んだ。そして、こっちこっちというふうに手招きした。
　私は左右を見回したが他に立ち止まっている人は見当たらないのでカフェに赴いた。
「こんにちは」
「こんにちは。すみません、じっと見てて」
「可愛い女の子に見つめられてたら照れるよ」
「あっははは…」
　くわぁ～、なんてキザな台詞。顔から火が出そうだった。
　可愛いか綺麗かの二択のみで強いて選ぶとするなら、私はかろうじて前者になるだろうが、容姿性格ともに「ぼんやり系」の田舎女子は質問対象外にしないといけないはずだ。
　「可愛い」なんてカッコいいお兄さんに言われたら嬉しくないはずがなかったが、私には行里さんという想い人がいる。彼はきっとこの常套句で何人もの女子を口説いているんだ騙されてはいけないと戒めたらドキドキ感が冷めた。
「昨日はどうもありがとうございました」
　私は気を取り直して再度お礼を述べた。
「どういたしまして。ここどうぞ」
　彼は前の席を勧めてくれた。
「失礼します…」
　テーブルの上の資料には、現在も残る伝説やらなんか奇妙な題名のものが多かった。

「あ、そうだ。まだ名乗ってなかったね。僕は浮図芽蓮（ふずめれん）と言います」

「わ、わたしは珠崎歩知です」
　受け取った名刺には「民話研究者」と書かれていた。
　私は名刺と彼とを交互に見た。外見から民話研究者という肩書きとは程遠かったからだ。
「意外？」
　そんな心を見透かしてか彼は笑った。
「あ、いや、その…」
「よく言われることだから」
　浮図芽さんは気を悪くすることなくにこやかだった。
「民話を研究されているんですか？」
「そう。民話だけじゃなくて各地の伝説や神話とかも調べてるよ」
「ほお〜神話…」
　その言葉を聞いて月為と葉陽を思い出した。
「神話ってたまに耳にするんですけど、今もあるんですか？」
「それなら最近調べたものがあるよ」
　彼はテーブルに置かれた資料の一部を取り出しパラパラとページを捲った。
「現在ではいろんな分野で神様がいるらしいね。衣食住に関する神様然り、その中でも比較的新しい神様が…」
「あったあった、これだ。エコの神様」
「エコの神様！？」
　どんぴたりな話題に思わず声を上げてしまった。しかし、彼は気に留めることなく次へ進んだ。
「今から二十年前、人間の環境保護対策に乗じてエコの神様が任命された。任命されたのは神の一人であるエコリという者だった。エコリは「はっぴぃ運」という極めてまれな能力を持っていたが、神になる際に統べてを治める神によって地上に落とされた。
エコリは統べる神の指示の元、人間の模範となるよう天上界に住まう使い達の生活を厳しく規制した。そうして徹底したエコ精神を身につけさせようと励んだ。
ところが、十年前使い達の反乱が起きた。原因は人間の私利私欲のために打ち出されたエコ運動に対する使い達の不安と、エコリのはっぴぃ運の欠如による情緒不安定だと言われている。
　反乱は統べる神によっておさまったが、エコリに味方した三人の使いが処分を受けた。一人は力を半分に、一人は魂のみの存在に、一人は地上に下れなくなった」
　そこまで読み終わると彼は資料をテーブルの上に戻した。
　三人の使いのうち二人はまさしく月為と葉陽のことではないか。
「神話のわりには案外シュールな話ですね」
　現在進行形で起こっている出来事なのでもはや神話ではなかったのだが。
「はは、本当に怖いのは外敵じゃなくて内部分裂だからね」
「そのはっぴぃ運っていうのがあったら、エコリ様は平穏でいられたんですかねえ？」
「そうだろうね」
「一体どうして統べる神ははっぴぃ運を外したんでしょうか？」
「恐れたのさ」
「恐れた？」
「はっぴぃ運は周囲を幸せにする能力だけど、それは無意識だからできることなんだ」
　私はうんうんと同調した。この説明は前にも使い二人にもしてもらったのと同じである。
「誰かのために使うと堕落させる危険性がある。それで起きる諍いに神は恐れたんだろう」
「ということはエコリ様自身は、はっぴぃ運がどういうものか知らないんですか？」
「心の安定剤のようなものじゃないかな。今までの話は全部僕の推測だけどね」
　いや、半分以上当たってます…と私は答えたかった。
　それにしても、天上の世界のこともリアルタイムで知ることができる世の中になったんだなあと思うと、なんでもかんでもデジタル化するのにもあまり抵抗がなくなってきた。

「とにかく、はっぴぃ運は絶対必要ってことなんですね」
「そう、必要不可欠だよ」
　彼は深く頷いた。
　その後しばらく沈黙が流れていた。私はテラス前の横断歩道を行き交う人々を何気なく眺めていた。
　その中にタバコを片手に信号待ちをしている若者がいた。青になって渡り始めると、道路の真ん中にタバコをポイと投げ捨てた。
（よくもまああんな堂々と…）
　ああいう光景を見ると妙に腹立たしくなる。タバコをポイ捨てしたからってゴミが増えるっていうわけではないけれど、道を灰皿と同一視している神経が信じられなかった。
　火のついたタバコからは白い煙が立っていたが、すぐにタイヤの下敷きになってどこかへ飛んで行った。
「ああいうの見るとイヤだね」
　彼は口を開いた。おそらく同じ現場に注目していたのだろう。
「あんな人がいるからタバコ吸う人のイメージがどんどん悪くなるんですよ。道はゴミ箱じゃないのに」
「ただの吸殻としか思ってないんだよ。実際、あれが直接環境破壊に繋がるってわけじゃないから」
「あれがもし、冷蔵庫とか家電製品なら不法投棄だ云々言われるけど、タバコはポイ捨てされても普通、そのへんに落ちてるからおかしくないっていうふうに思ってしまうんですよね。レジ袋減らすよりポイ捨て禁止に有効な政策とったほうが良かったのになあ…」
　私はついつい日頃から腹に据えかねていることを、知り合ったばかりの人に打ち明けていた。けれども彼は静かに耳を傾けてくれていた。
　二人でのんびり話していると、駅へ向かう方角に月為と葉陽の姿を捉えた。
「あの二人…」
「お友達？」
「そうです」
　厳密には違ったが、私は彼の問いに簡単に答えた。
　二人は揃ってカフェに…正確には、葉陽が無理矢理月為を引っ張って連れて来ていたという方が正しかった。
「じゃあそろそろ僕も帰るよ。あっちだから」
　彼はテーブルの資料を片づけ、帰る支度をし始めた。
　二人がテラス席に着くと彼は会釈をして颯爽と立ち去った。
　見送った後葉陽は、
「ちょっと何？ポチはあんなチャラ男の連れがいるわけ？」
　意外と言わんばかりの表情だった。
「見た目はアレやけど、民話研究者らしいよ」
「へえ、そうなの。でも何でそんな奴と」
「昨日、横断歩道で車に轢かれそうになった所を助けてもらったんです」
「人間のくせにやるね…」
　葉陽はチッと舌打ちした。人に敵対心を抱く理由がさっぱりわからなかった。
　彼女は置いといて月為に状況を尋ねた。
「サピョリスは見つかったんですか？」
「いや、全く気配を感じない」
「またひょこって現れそうやけど」
　探そう探そうと躍起になるよりも、そのうち出てくるだろうと気楽に構えていたほうが効率的な気がした。
「ったく、世話のかかる生き物だよ…」
　テーブルに両手をついた葉陽は項垂れた。

「ふう…地上は無駄に体力を消耗する」
　月為も疲れ切っていた。
「また明日出直しましょ」
「そうするか」
「天上界に戻るんですか？」
「ううん。一日じゃ着かないからね。近辺に身を潜めてるの」
　葉陽は背筋を伸ばした。
　不眠不休で指名手配犯を追跡しているような口ぶりだった。神様やその仲間はあまり眠らなくてもよい身体の仕組みになっているのかもしれない。
「また明日ね」
　別れの挨拶を告げると二人は階段を下りて、駅とは反対方向に歩いて行った。

　いつの間にかうちの部署は二人増えていた。もちろん、それを知っているのは私としろま先輩だっった。リーダーは明日まで出張で留守、未だにヒトボンは部屋の隅っこでうすら笑いを浮かべたままで放置されている状況である
　私、月為、葉陽の三人で作戦会議をしているとどこからか嬌声が聞こえてきた。
「ふっきゅう〜ぅ」
　神出鬼没サピョリスだった。
「ぬあっ！サピョリス！」
　天使の顔した悪魔の化身はすっかりアイドル気取りで、耳を垂れて首を傾げたり、両手を合わせてしっぽを揺らしたり、かわいいと思い込ませるポーズまでとっていた。けれども、そんな小細工が通用する相手ではなかった。
「捕まえろ！」
　月為の叫びは部屋じゅうに響いた。彼は窓際にいたサピョリス目掛けて高くジャンプした。
　その目つきは真剣そのものだった。サピョリスは危機を察知すると、
「ふきゅっ？ふきゅきゅ〜」
　すたこらさっさと逃げていってしまった。
「とろそうやのに逃げ足速いなあ」
「神獣だからね、し・ん・じ・ゅ・う」
　葉陽は地団駄を踏んで悔しがった。
「…逃したか」
　月為はドアの先を見やった。さっきの剣幕はどこへやら、いつもの何か考えているようなそうでもないような顔に戻った。
（必死なんやろなあ）
　喜怒哀楽の表現に欠ける彼の感情をどうにか読み取ろうとしたが真意は不明だった。
　サピョリスが消えて数分後、しろま先輩が部屋に戻ってきた。
「そろそろ行くか」
　そう切り出したのは月為だった。先輩を気にしてのことだろう。
　葉陽も無言で頷くと先輩と入れ代わるようにして二人一緒に部屋を後にした。
「すみません…」
「歩智のせいじゃないんだから。オレとしてはあんまり関わらないでほしいけど」
　先輩は至極不安そうだった。
　そりゃそうだ。不安定な精神状態が原因とはいえ、故郷を襲った張本人に協力なんてしたくないだろう。私が逆の立場だったら同意見だった。
「それはそうなんですけど、運は返してあげたいんです。私に入ってたってことは、ちょっとは関係あると思うし。気づいてなかったってだけで」
「何のリスクもなければ賛成するよ。でも、確実に成功するっていう保証もないから」
「何が起こるか、起きてるのかさえよくわからないんですけど…」
　私は俯いた。

　確かにあの二人が正しいとは言い切れない。それでも放置しておけない。確信はないけれど私の中で協力する選択が迫られていた。
「二人はエコリ様のために運を取り戻そうとしてます。納得してもらえるような理由はないんですけど、そうしないといけないって思うんです」
「運があったから？」
「それとエコリ様を助けたいって思ったからです。今が上手くいってるのも、きっと見えへん力のおかげなんかなあって。それが不安定になったら良くないことが起きそうな感じがして」
　私は言いたいことを上手くまとめられなかった。
「私の力じゃ何の役にも立てへんやろうけど、できることがあればしたいんです」
「わかったよ」
　先輩は諦めたかのようにふうと息をついた。
「そういう気持ち、とっくの昔に忘れてたかも。オレも歳とったなあ…」
「先輩も若いじゃないですか」
「社会人になると厳しい現実に追われて純粋な気持ちがどんどんなくなっていくんだよ。歩智は変わらないでいてね」
「はい…心がけます」
　私は力強く頷いた。先輩は爽やかな笑顔だった。

　日も暮れた午後六時過ぎ。最寄駅から自宅に向かう途中、ただならぬ気配はすぐそこまで迫っていた。
「ここまで来るとストーキングも普通に思えてくるなあ」
　私の皮肉にも当の本人は動じなかった。
「何時くらいにあのへんにいるから！とか言って待ち合わせようとは思わんのやな」
「時間感覚が違うんだよ」
「天上界の人は？」
「月為が」
　葉陽は上目遣いで月為を見た。彼は少し眉間に皺を寄せていた。
「それにしても、毎日会ってるのに肝心のサピョリスがいなきゃ仕事しようにもできないよ」
　彼女は腕を組んだ。仕事というのは私からはっぴぃ運を取り戻すことだろう。
「サピョリスってあちこち動きまわる動物なん？」
「ぶら下がってるものが好きなんだ。振り子とかね。喜んで噛みつくの」
「あれはかなり痛かった」
「噛まれたん？」
　葉陽はぷぷっと笑った。
「いつだったか、メフィレスと喧嘩して空中で足だけバタバタさせてたら、太腿目がけてサピョリスががぶっ！っとね」
「エコリ様もえらいもん飼ってるなあ…」
「んまあ、愛くるしい姿だからね。みんな甘いんだよ」
「ところで、そのメフィレスっていう人もエコリ様の使いなんですか？」
「そうだけど？」
「一緒に運を探していないんですか？って、地上に下りて来れへんのやったっけ」
　私は慌てて手を横に振った。
「その通りだけど、三人仲良しってわけでもないんだよね。あたしは身体がなくなって以来、魂入れるとこが偶然月為にあったから行動も一緒にせざるを得ない状況なんだ。んまあ、奴はちょっと変わってるのもあるけど」
「変わってる？」
「使いは使いでも、出身地が違うから雰囲気も違うっていうのか…」

「まず容姿が違う。銀の髪に碧い瞳、それと羽がついている」
　月為が補足説明してくれた。
「ふうむ、西洋人ぽいってことか。羽は知らんけど」
「奴の生まれは魔穴の一つで、魔法で付けたらしいよ」
「まけつ？」
「神様や使いが住んでるところが天上界、人間が住んでるのは地上界っていうのは知ってるよね？」
「はい」
　というか今まですんなり話が進んでいるので多分そうだと思っていた。
「他に魔界っていうところがあるの。そこに住むものたちが魔法を使うんだよ。魔法って人間には憧れの対象らしいけど、天上界ではすっごく嫌われてるの」
「神様もそういう力使うんじゃないんですか？」
「神様や使いの力は術って呼んでる。魔法とは厳密には違うけど、特殊能力っていうのではたいした変わりはない…よね？」
　彼女はいきなり月為に同意を求めた。
「ああ」
「魔界の生き物っていうのは基本的に人を悪の道へ導こうとしてるから、あたし達にとっては敵みたいな存在なの。そんなわけでずっと昔、天上界と魔界どうしの争いがあって、その時に魔界の者が天上界にいくつか穴を掘ったの。それが魔穴。黒い渦巻いた穴で、近づくと力を吸い取られちゃうって話。今は跡形もないけど」
「へええ…」
「あたし達みたいに比較的若い使いは魔穴があったっていうことすら、他の神様から聞いて知ったくらいだからね」
「その魔穴は何か問題があるん？」
「それ自体にはもう問題はないの…」
「？」
　彼女はまた月為の方に視線をやった。
「昔、魔穴があった場所から生まれた使いを排除する神の意向だ」
「はっ？」
　論文式の台詞に間の抜けた声を出してしまった。
「要するに元魔穴に生まれた使いは偏見の目で見られたり、疎外されたりするようになったってことだよ」
「えええええ！天上界でも差別ってあるんですか？」
「あるよ。怪しげな術を持ってるとか…それは使い個人の問題だと思うけどね。あと見た目違うからとかいう理由も大きいね。人間を導く存在とかなんとか言っちゃって、人間と同じような脳みそなんだよ。くっだらない」
　彼女はご立腹だった。
「ああ、ごめんね。とにかくそんな天上界だから彼も身を守る術っていうか、魔界の力も借りて生きるしかなかったんだと思う。それでも、エコリ様は彼を受け入れたんだよね。いや～地上襲撃犯も肉食も不良も拾ってくれるなんてエコリ様の方が相当の変わり者だよ」
　葉陽は感心していた。
　今の私は「あなた達皆変わり者に入ってます」という目つきをしていたにちがいないが、彼女は気に留めていなかった。
　三日前に会ったばかりなのにすっかりメンバーの一員として馴染んでしまった私。これまでの人生の中で最も濃いといっても過言ではない日々だった。使いというのに人間と変わらない…のはこの二人だけなのかもしれないが、非現実的な日常もたまには程よい刺激になって面白いものではないかと楽観的に捉えることにした。

　こうして三人で駅からまっすぐ歩き進めていると、途中の南に入る細い道の前ではたと足

を止めた。普段は通り過ぎてしまう何の変哲もない道。しかし今日は奥の方からぼうっと微かな光が照っていた。
「あれは…」
　朧げに目に映ったのは小さな人の影。それは光を纏ったままこちらに接近していた。近付くとともに眩さは止み、やがて目の前に一人の少女が現れた。
　歳は十四、五くらいだろうか。流れるような黒髪に雪のように白い肌。レースがふんだんに使われたひらひらのワンピースを身に着けていた。
　いつかの夢で見たあの少女だった。ただ一つ、生成り色の手編みマフラーを学生風巻きにしていたことを除いて。
「エコリ様！」
　葉陽が叫んだ。
「どうしてここに！？」
「あなたたちを探しに来たのです」
　エコリ様と呼ばれた少女は、外見からは想像もつかないほど大人びた口調だった。
「勝手に抜け出してきたら危ないじゃないですか！」
「まあまあ、落ち着いて」
　エコリ様は葉陽を宥めると月為の方に視線をやった。
「月為」
　彼女は無言で見つめていた月為に呼びかけた。
「随分探しましたよ」
「すぐに戻るつもりだった」
「出かけるときは一声かけていきなさいと言っているでしょう」
「む、すまない」
　母親が子供に説いているような光景だった。そして今度は、
「あなたがはっぴぃ運を持っているのね」
　クルリとこちらを振り返った。
「あ、はい…サピョリスを追ってるとこです」
「この頃見かけないと思ったら地上へ遊びに行っていたのね。使いも増えてきてるから心配だけれど」
「使いが増えてる？」
「ええ。使いは神と人間と中間の存在なような者だから、地上界で人間として生活することもできるの。最近は天上界よりも地上界の方が意心地が良いからといって、地上界に住み着く使いが多くなってるの…」
　エコリ様は少し悲しそうな顔だった。
「それはあなたが気にすることではない」
　口を開いたのは月為だった。
「天上界を取りまとめているのは統べる神だろう。神が嫌だとしてもエコリ様が原因ではないし、使い自身が人間に憧れたとか人間かぶれな理由で地上界に住んだというだけだ」
　生真面目な台詞の中にもユーモアを忘れないセンスでもあるのだろうか。
　エコリ様の表情もちょっと和らいだ。
「…ありがとう。危険が迫ったら月為に頼みますね」
　月為は目を泳がせたがすぐに持ち直した。
「といっても、今の力では足りるかわからない」
「力？」
「光術の力だよ」
　葉陽が脇からひょこっと顔を出した。
「ああ、半分にされたとか言ってたっけ。それってすごいものなん？」
「もちろん！あたしが能力をコピって、それを月為に送ると凄まじいエネルギーになるんだから！」

彼女は得意げに話してみせた。
「天上界で敵う使いはいないよ」
他人をこんなに持ち上げるなんて葉陽は月為が好きなのだろう。というより、自分がいないとてんでダメ男！引っ張ってやらんと！と姉御肌タイプだと見受けられた。
「それは少し言いすぎですよ」
エコリ様はやんわりと否定した。葉陽は、てへっと舌を出した。
「その通りですね。使い全員知ってるわけじゃないしね。その範囲で対等にやり合えるっていったらメフィレスくらいかな」
「そういえば、喧嘩したことがあったんやっけ」
「そうそう。理由はすっごくくだらないけど…」
彼女は見上げた。月為と視線が合うとにこおっと面白がるように笑んだ。
「くだらなくはない」
「はいはい、男同士のナントカってやつでしょ」
「一体何が原因やったん？」
「アルミホイルってあるじゃん？あれをね、天上界でも使ってるんだけど、作ってるとこが二つあるんだよ。一つはエーゾホイル、もう一つはイイヨホイルっていうの。んで、なんでそんな話題になったのかは知らないけど、月為が「アルミホイルといえばイイヨホイルだ」て言ったら、メフィレスは「いや、エーゾホイルだ」って言い返したんだよ。それで両者一歩も譲らず…」
「喧嘩に発展ってわけですか」
「そゆこと」
「なんか平和やな」
「ま、そんな時代もあったってことだよ」
「ところで…」
エコリ様がゆっくりと瞬きをした。
「メフィレスは見かけませんでしたか？」
三人の顔を見渡したが、三人とも首を横に振った。
「見かけるにしても、地上界には下りて来られないのだから天上界のどこかだろう」
「そこが気になっているのです」
「どういうことですか？」
葉陽はいつのまにかきちんと月為の隣に立っていた。
「彼なら、統べる神の目を盗んで地上界へ降りることくらい容易なのではないでしょうか。今のところはまだそれらしい情報は聞いていませんが」
「もし地上界に来ていたとしたら、私達が見つけているはずだ」
「そう、ですね。とにかく無事でいるとよいのですが」
エコリ様は不安げな表情だった。
「ケイタイがあれば便利やのに…」
「ケイタイ？」
何気ない私の呟きにエコリ様は反応した。
「連絡取り合えるものっていうのかな？」
説明に困っていた私に葉陽が、
「あたし知ってる！デンワとかメールとかできる機械で、片手で打つんでしょ？」
興味津々の勢いで尋ねてきた。
「あ、ああ、片手は…両手で打つ人もいるけど」
「あれいいよね。天上界にもそんなのあればいいのにねえ」
うっとりとしている葉陽に対して月為はドライだった。
「私は要らないな」
「なんで？」
「勘が鈍りそうだからだ」

「まあ、確かにね。使い本能が目覚めなくなるかもしれないね」
「それは困りますね」
　エコリ様も、ふふっと声を出して笑った。
「さて、あまり長居はできないのでそろそろ戻ります」
「はい、必ずサピョリス捕まえてみせます！」
　葉陽はガッツポーズをして張り切っていた。
　エコリ様は微笑むと再び光の中へ消えて行った。
（本当に神様に会ったんやなあ…）
　私は感動でまだドキドキしていた。
　エコリ様は本物の神様だった。あの全て浄化されるような輝きは、邪心だらけの人間では到底真似できるはずがなかったからだ。あの人のためにも早く収拾をつけないといけない。
「サピョリスどこかなあ…」
「ふきゅう〜」
「え？」
「いるやん！え、今来たん？」
　あと二十秒早ければすぐにエコリ様に返せたものを。
　目の前の動物はそんなこと全く知るはずもなく、いつものように愛嬌を振りまいていた。
「早くゲットするよ！」
　葉陽は真っ先にサピョリスに向かってダッシュした。
　追いかけて捕まえられる動物ではないことを学習していた私は、
「待って！ストップ！」
　と叫んだが彼女の耳には届いていなかった。
「仕方がない、追うぞ」
　月為の後に続き私も葉陽を追った。
　どうやら彼女は、私の自宅マンション付近のコインパーキングの一角に辿り着いたらしい。
　サピョリスが駐車場最奥のコンクリートブロックまで追い詰められていた。
「ふふふふ…観念しなさい！」
「ふきゅ〜っ！ふきゅきゅきゅ〜！」
　サピョリスはその小さな体をびくびくさせていた。
　しかし葉陽はそれを楽しむかのようにじりじりと距離を縮めていた。
「あれは捕獲体制だ！食われるぞ！」
「えっ？あっ、忘れてた！」
　葉陽は肉食だったことを今し方思い出した。
　私が驚いている間に月為が葉陽の前に立った。
「やめろ。コイツは獲物ではない」
「あ…冗談だよ！もうっ！」
　我に返った葉陽はサピョリスに不気味に微笑んだ。
「ふうきゅう〜！！」
　サピョリスは怯えて彼の後ろに隠れた。
「嫌われたな」
「これだから小動物ってイヤ」
　葉陽はぷんと怒って腕を組んだ。
　月為は足元のサピョリスを両手で抱え上げると私のいるところまで戻って来た。
「覚悟はいいか？」
「はい、できてます！」
　サピョリスの真ん丸おめめがだんだん迫って来る〜と思った瞬間、ぱっと消えてしまった。
「何だ！？」
　声を上げたのは月為だった。
　私達は何が起きたのかわからず辺りをキョロキョロ見回していると、大通り北側から見覚

えのある男性がこちらに歩を進めて来ていた。
「浮図芽さん？」
　彼は私達の前に来るとぴたりと立ち止まった。右腕にはサピョリスを抱えていた。
「ふう…危ないところだったよ」
「それを返してもらえないか？」
　月為は浮図芽さんを凝視した。彼はふっと口元に笑みを浮かべた。
「返す？返したらその子に噛ませるんだろう？そしてエコリ様に運を届けてめでたしめでたし…そんなシナリオを想定しているのなら渡せないな」
「お前一体誰だ？」
「月為、こいつまさか…」
　葉陽が口に手を当てた。
「やっと気づいた？」
「メフィレスか」
　月為が小さく舌打ちした。
「ほうらね、あたしのチャラ男予想当たってたじゃないの！」
　彼女は肘で月為を小突いた。
「え、でもこの人人間…」
　私はあたふたしていたが葉陽が説明してくれた。
「あたしとしたことがうっかりしてた。地上界へ降り立つ時は人間に近い姿で赴くっていう決まりがあったんだけど…気配まで消せるとはね」
　なるほど、こないだ会ったときに正体を見抜けなかったのはそのせいだったのか。と納得している場合ではなかった。
「君には世話になったよ」
「え？」
　私は急に話しかけられて焦ったが、一連の出来事を思い返してみれば合点が行くことばかりだった。
「横断歩道で助けたのも…」
「全て計算通りさ。ああすれば君は僕に興味を持つと思ったからね。民話研究者と名乗って情報提供したのもその一つ」
「お前はエコリ様の使いだろう？何故このようなことをする？」
　月為は私の心の中と同じ疑問を彼に投げかけた。
「月、君にはわからないだろうな。誰が本当に悪くて誰が一番の被害者なのかを」
「全てはエコリ様のためだろう」
「そう言うと思ったよ。ただ重要なことを忘れているよ」
「重要なこと？」
　メフィレスはサピョリスを撫でた。いつのまにかサピョリスは彼の腕の中で丸まって眠っていた。
「その勿体ぶる癖やめて、さっさと教えなさいよ」
「そんなに焦らなくても明日には分かるさ…」
「明日？」
「では、そろそろお暇するよ」
　彼がパッと手を翳した途端、黒い靄が彼の周りを覆った。
　靄が晴れると明るい光が差した。先程の姿とは別人の彼に私は仰天した。一番先に目についたのは、背中に映えた大きな白い羽。そして、さらっさらの銀髪に碧い瞳。かっちりしたスーツも光沢感のあるグレーのジャケットに早がわり。同色系の細身パンツにベルト付きハーフブーツをイン。そう、トレンドの「ブーツイン」だ。まるで、どこかのビジュアル系バンドのメンバーに所属していそうな風体だった。
「じゃあね」
　彼は背中の羽をバサリと広げると空高く飛び上がった。

「待てっ！」
　月為は鋭い声で叫んだものの彼にはどうすることもできなかった。
　メフィレスは笑顔のまま飛び去っていった。
「あと少しだったのに…」
　葉陽は拳を握り締めて悔しがっていた。
「使いって空飛べないんですか？」
「飛べてたらとっくに追ってるわよぅ…」
　彼女は頭を抱えていた。
　月為は取り乱すこともなく、ただ空を仰いでいた。

　収穫なしで帰宅した私は、夕食後にクッキーを焼いていた。
　先日「スーパーさきわ」のワゴンセールで「簡単にできる手作りクッキーセット」が半額で売られていたので、試しに作ってみようと思い購入したのである。
（いい匂いしてきたなあ…）
　小腹の食欲をそそる香りがオーブンから漏れてきていた。出来上がり三分ほど前になると様子を見に行った。こんがりキツネ色に焼けていた。
（これなら明日持ってけるな）
　私はむふふとまた妄想に耽った。成功したら行里さんに渡そうと決めていた。
　オーブンレンジの扉を開けてクッキーの焼き上がり具合を確かめた。ハート型と星型にくりぬいたプレーン味のシンプルなクッキーだったが、初めてにしては上出来だった。
　オーブンから天板を取り出し、焼き上がったクッキーをクッキングシートごとお皿に移した。粗熱を取った後、カラフルなドット柄の透明小袋に十個ほど詰めた。
　大人の女性ともなると、トリュフやフォンダンショコラなど洒落たスイーツを作って、彼氏や憧れの人に食べてもらいたい！という願望があるのだろうが、そこまで手間隙かける時間はなかった。
　それに客と店員の間柄というだけで張り切って手作りお菓子を渡されたら、受け取った方も変に気を遣うに違いないので、家にたまたま材料があって、昨日はたまたま作る時間があって、たまたまいっぱいできたから…とたまを何匹か連れて挑むのが妥当だと思ったのだ。
　午後十時も過ぎたというのに、私は余ったクッキーをボリボリ食べていた。これだからダイエットが長続きしないのだ。
（やっぱ手作りは美味いなあ～）
　自画自賛しながら、食べ切れなかった分をタッパーに入れた。
　何か音楽でも聴いて寛ごうとミニコンポの電源を入れようとした時だった。
　ドォン！と轟音が響き渡った。
（何！？）
　私は急いで窓を開けてベランダから外を確かめたが、特に異常は見られなかった。
　部屋に入ろうとすると眼下にちらちらと光るものが目に入ってきた。私はベランダの手すりを持って下を覗き込んだ。
　チカチカと黄色っぽい明かりが点滅していた。それは左右に行ったり来たりしていたので私の頭も自然につられて左右に動いていた。
「がぶ」
　突如頭に激痛が走った。
「…いたたたただだだっ！痛い！」
　何かに頭を挟まれた。私は頭を思い切り振り追っ払った。
「ふきゅっ！」
（え？この声はもしや…）
　私が顔を上げた先には鳥人間…ではなくメフィレスが浮いていた。
「あっ！」
　片手にはサピョリスがちょこんと二足立ちしていた。

「どうもありがとう」
「どういたしま…じゃない、もしかして！」
　問いかけるやいなや彼はさっと飛び立ち、夜の闇に紛れてしまった。
（ど、どうしよう…これは夢や。きっとおそらく絶対！色々ありすぎて疲れたんやろう。早く寝よ）
　私は今の出来事一切を記憶の奥にしまい込み、さっさと風呂に入り床に就いた。

　翌朝の目覚めはイマイチだった。よく眠れたのかどうかも定かではなかった。
　とりあえず、昨日作ったクッキーだけは忘れずにカバンに入れた。
　スーパーの前を通るといつもよりガランとしていた。この時間ならいつもは搬入のトラックが止まって、積荷を下ろしているところだった。
　入り口の前を通り過ぎようとしかけ、自動ドアに白い貼紙がしてあったので立ち止まった。
「今週土曜日を持ちまして閉店いたします。長らくのご愛顧誠にありがとうございました」
（え？なんで急に？）
　私はあんぐりと口を開けた。
（まさか本当にはっぴぃ運をとられたから？いやいや、そんなわけはない！）
　きっと偶然だと信じて私は駅に向かった。その途中にもちろんオアシスに寄っていった。
　リンリーン…
　心なしか鈴の音が悲しげだった。
　美味しそうなパンを選ぶより真っ先に行里さんの姿を探した。ところが店内には見当たらなかった。
　私はがっかりしながらもトレーとトングを取って、いつものクロワッサンを一つ入れてレジに向かった。レジ担当は店長のおじさんだった。とそこへ勢いよくドアを開けて女の子が入ってきた。
（朱美ちゃんや）
　彼女はレジまでやって来ると辺りをぐるりと見回した。
「店長さん！行里さんはお休みですか？」
「ああ、たまには羽伸ばしに行ってきなよって勧めたんだよ」
「ええ〜でも、昨日は忙しいって言ってたのになあ…」
「それがねえ、突然暇ができちゃって」
　おじさんは苦笑していた。
「何でだろう…」
　レシートとスタンプカードを返してもらった私は店内を見渡した。
　いつもは通勤客で賑わっているはずの時間帯なのに、今日は私含めて三人しかいなかった。
　もしかして…とここまで激変した現実を見せ付けられたら、運が原因の一つであると確信するほかなかった。

　会社に着いても気分が晴れなかった。というのも、私が考えた商品デザイン画に関して、お客さんの立場で考えられていない独りよがりの物であると、別室にいる営業部長に滾々と説教されたからだった。
　部屋に戻りパタンとドアを閉めた私は項垂れた。
「わたしこの仕事向いてないのかも…とりわけ取り柄ってのもないし」
　しょんぼりと机に向かうと、棚を整理していたしろま先輩が振り向いた。
「それで仕事できてたら転職する人なんて世の中にいないよ」
「そうなんですけど…」
「得意分野があっても発揮できない環境にある人もいるし、得意じゃないけどスムーズにやっていけてる人もいる。仕事もそうだけど、まわりに起こる出来事は自分ひとりの力だけじゃなくて他が影響しあって動いてるんだよ。だからどこでも適応できるっていうのは普通の

ように思えて案外すごいことだとオレは思うんだけどな」
　先輩は立ち上がって窓の傍まで行った。
「それを知らない学生なんかは、就活で長所短所をきちんと調べて自分の向いている仕事を見つけようとして、入社してから現実とのギャップに落ち込むわけ」
「ああ、入社した頃に「好きではやってけない！」とか脅されましたよ。そんなわけじゃないのに…」
「そういうもんだよ。確かに好きは得意に比例しないけど、「好き」って気持ちが一番の原動力になるんだよ」
　先輩は振り向いて優しく微笑んだ。
「友達に頼む時だって、あの子は役に立つからとかこういう取り柄があるから…とかまず考えないだろ？その人が好きだから、信頼しているから相談してみようって思える。このことを教えてくれたのは歩智じゃないか」
「え？」
「エコリ様を助けたいっていう気持ちだよ。困ってたら助けずにはいられない、自分も何とかしないといけない。そこにはきっと見えない力が働いてるんだ。自分の良いところを発揮しよう！って気を張るよりも、やるだけやってみる！って気ままに取り組むのでいいと思うよ。そしたら自然と上手くいってるから。多分だけどね」
（見えない力…）
　それを耳にしてすぐに思い浮かんだのはエコリ様の存在だった。はっぴぃ運の持ち主と貰い手だけがわかる奇妙な感覚というのだろうか。
（あ、そういえば…）
　私は先輩に励ましてもらった直後に残念なお知らせをしなければならなかった。
「昨日の夜、サピョリスに噛まれました…」
「えええっ！？」
　先輩は驚愕した。
「それは月為が？」
「いいえ、メフィレスです。上手いことベランダに誘導されて頭をカプッと」
「そうか…」
「なんか嫌な予感がします」
　危惧していると、コンコンコンと軽やかなノック音が響いた。
「失礼します〜」
「杉ちゃん」
「またお客さんですよ。今度は二人。こないだの男前の人と可愛らしいお姉さん」
「ああ、わかった。ここに来るように伝えてくれへんかな？」
「うん、待ってて」
「ありがとう」
　パタパタと杉ちゃんが駆けて行った約十秒後に月為と葉陽が姿を見せた。
　部屋に入ってくるなり月為は、
「運がエコリ様に渡ったらしいな」
　と報告してくれた。
「戻ったん？それなら無事に…」
「違うよ。その後誰かのために使ったんだよ」
　葉陽は眉をしかめた。
「ええ？じゃあ何？サピョリスに入ったはっぴぃ運は他の人に移ったん？」
「いや、まだだ。運はまだサピョリスが持っている。エコリ様以外は使うことができないからな」
「ううん、どうなってるかわからん…」
「つまりはっぴぃ運っていう能力は、エコリ様本人しか使えないもので、他人がその力を使う場合にはエコリ様に贔屓してもらうか、運が入ったサピョリスを手に入れるかのどちらか

っていうことじゃないかな？」
「ほほう、なるほど！」
　先輩の説明は明朗で非常にわかりやすかった。
「でもそれなら運のあるサピョリスを入手したら、誰でもはっぴぃ運を濫用できるような…」
「それはムリムリ」
　葉陽が手を横に振った。
「持ってもエコリ様の気持ちがその相手に向いてなきゃだめ」
「じゃあ、わたしの中にあった時って」
「それは事情が違うよ。エコリ様が願っていたとはいえ、ポチは運があることを知らなかったんだから」
「あ、そっか」
「それはともかく、エコリ様を唆して運を悪用させようなんて一体どこのどいつが…」
「え？それってメフィレスじゃないんですか？」
「そりゃ運は盗まれたけど、エコリ様がそんな奴にまた渡すわけないでしょ」
「それはそうなんですけど…あそこまで用意周到にしといて取り戻して終わりってことはないと思います」
「オレもそう思う」
　先輩も同意見だった。
「あるいは別の誰かが黒幕とか…」
　彼は壁にもたれかかっている月為に視線をやった。
「それを計画した時点で葉陽に食い殺されるな」
　先輩はぷっと吹いた。
「ちょっと！あたしは肉だったら何でもかんでも食べると思ったら大間違いだよ！」
　引き合いに出された葉陽はすっかり怒っていた。
「本人に理由を聞いてみないとわからないね」
「そういえば、エコリ様には話したんですか？」
「それがねえ、運が悪いことに今朝から神様どうしの会議があって、待てなかったからそのまま降りてきちゃったんだよ」
「この日も計算されてたというわけだ」
「とんだバレンタインやわ…」
　私はトホホと肩を落とした。
　カバンの中に忍び込ませてきたクッキーは無事に行里さんに届けられるのか。いっそのことバラバラに砕けてほしかった。
　部屋内の空気は沈黙で淀んでいた。
「ふきゅきゅ？」
「この声は…」
　もう何度このキュートなボイスに悩ませ続けられたことか。
　私達は全員神経を研ぎ澄ませ辺りを隈なく探した。
「ドアのとこ！」
　私が指差した先、ドアのわずかな隙間にサピョリスは挟まっていた。
「しゃべれたら全部吐かせてやるのに！」
　葉陽は鬼の形相でサピョリスを睨みつけた。
「ふきゅきゅう～！」
　サピョリスは全身の毛を震わせると、怯えて逃げていってしまった。
「もう少し優しく接したほうがいいぞ」
「すっごく優しいじゃん！」
「あの～追いかけた方が…」
「そうだね！行くよ！」

「わたしもですか？」
「当たり前でしょ！」
　私は先輩の顔色を伺った。彼は引き留めることなく微笑した。
「リーダーには適当に誤魔化しておくから。早く帰ってきてね」
「ありがとうございます…」
　これで心置きなく外出できると思うと、この会社の不干渉さに感謝した。一階に下りた私は表玄関から出ると怪しまれると思い、裏の倉庫口から出ることにした。

　逃げ足の速いサピョリスのことだから見失ってしまうだろうとふんでいたが、今日の奴はまるでどこかへ誘導しているかのように、走っては止まりを繰り返していた。
　私達は一切私語をせずにサピョリスの後を付けていた。サピョリスは駅に曲がる手前で急に速度を上げで走り出し姿を消してしまった。
「あ、こら！」
　急いで左に曲がったがサピョリスの姿はどこにも見当たらなかった。
「もう～どこ行ったんだよ！」
　葉陽と私は前後左右を見回していたが、月為だけは駅の上空を眺めていた。
「ちょっと、何ボケっとしてんの！」
「あそこだ」
「え？」
　私達も彼と同じように見上げた。
　ホームの屋根に銀髪の人物が立って…いや数メートルほど浮いていた。
　その表情からは感情が読み取れなかった。
「行くぞ」
　月為と葉陽は何も躊躇わずに改札口からホームへ入っていった。
　自動改札口を通っていたなら確実に足止めされていたところだったが、昼間の田舎駅で駅員さんが近辺にはいなかったということが幸いした。
　私はきちんと自動改札機に定期を通してホームへ出る階段を駆けた。

　もう昼前だというのにお日様は翳りそうなくらい弱い日差しだった。
　下り側ホームは私達以外誰もおらず、上りホームにはおばあさんとおじいさんがベンチに仲良く座っているだけで、いつもとさして変わりない光景だった。
　月為は上空のメフィレスに向かって叫んだ。
「下りて来い！」
　彼は私達のいるホームまでゆっくりと下降してきた。
「随分遅かったね」
「一体どういうつもりだ？エコリ様への背信行為か？」
「背信行為？そんな畏れ多いことできるわけないよ」
彼はほくそ笑んだ。
「そうか、君達は僕がエコリ様を騙したと思ってるのか。それなら間違いだよ。エコリ様は自ら僕にサピョリスを渡してくれたんだからね」
「そんなはずはない」
「そのセリフは嘘だね。月も知ってるじゃないか。運の仕組みのこと」
「く…っ」
　月為は言葉に詰まった。
「エコリ様がそうするようにコントロールしたって可能性もあるじゃない！」
　葉陽が言い返した。
「身体がなくなっても相変わらずだね、光合成は…」
「光合成って言うな！このチャラ男！」
「光合成？」

意味がわからず葉陽に問うた。彼女は苛立ちながらも答えてくれた。
「あたしの名前、「葉」に「陽」でしょ？それで「光合成」って…きぃ～ムカつく！」
彼女は軽くヒステリーを起こしていた。これもメフィレスの罠なのだろうかとも思ったが、彼女の性格を考えてみると普通の行動だった。
「エコリ様は神としての義務を果たそうとしているのさ。僕はそれを手助けしているにすぎない」
腹を立てている葉陽を尻目にメフィレスは私達に言った。
「もともとエコリ様は「不要な物は全て消す」という方針じゃなかったかい？」
「それは活動の無駄をなくす意味においてだろう」
「全ての原因は人間を良くするためという行動からだ。統べる神にとってみれば人間は自然を脅かす悪の生物。そんな悪の塊の存在はおかしいとは思わないのか？」
「人間を排除したところでどうなる？」
「排除？」
「そうしようと企んでいるのだろう？」
「はは、まさか。人間にはまだ地上で頑張ってもらうよ」
メフィレスは冷ややかに笑った。
「ただし、使いを降ろす」
「何だと！？」
「今の人間は他について何も考えないどころか疑問にすら感じていない。エコだエコだと騒ぐ世間に何となく呑まれ、反しているものをみれば環境破壊だの地球に悪いだのとほざく」
「確かに人間は利便性を追究する中で失っているものもある。だがそれは私達が介入してはいけないことだ」
「じゃあこのまま黙って見過ごすの？」
「……」
月為は黙り込んだ。メフィレスは瞼を伏せた。
「話していても決着がつかないね。そろそろ始めようか」
彼は方向転換した。背後には大人一人が入れる程の楕円状の穴がぽっかり開き、澱んだ黒紫色に渦巻いていた。
「あれは？」
「魔穴だ。使いを送り込む気か…」
「うじゃうじゃいるね」
ここから見えるだけでも三十数人はいた。
と思っていると、バタバタと階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきた。
「もう電車が来るんかな？」
「違う、あれも使い達だ」
「え？どういうこと？」
前と後ろを使い達で挟まれた私達は身動きが取れなかった。
「同じ思いの使い達が集まって来てくれたんだ」
そう口にしたメフィレスの手にはサピョリスが乗っていた。
「ふきゅっ！ふきゅきゅっ！」
短い両腕を握り締めて万全の戦闘体制だった。
「あれはこの事態を理解していないな」
「神獣って賢いんじゃなかったけ？」
葉陽がガクリと肩を下げた。
「これからどうするか見当はついていると思うけど、十分後に来る電車に使い達に乗ってもらう予定だよ」
「乗る？のっとるの間違いだろう」
「このコが人に噛み付くことでエコリ様の願いが果たされる」
「あの方がお前の悪事に手を貸すはずなどない！」

「悪事かどうかはエコリ様が決めることだ」
「月ならこの程度の使い一瞬で片付けられるだろう？」
「月為！なめられてるよっ！男を見せなさい！」
　葉陽は月為に攻撃をけしかけたが、彼は躊躇っているようだった。
「ああ、そうか。力を半分にされちゃったんだっけ…でも、試してみないとわからないよ」
「地上で使う気はない」
　月為はきっぱりと断った。
「使う気はない？嘘だろう。拳を震わせておいて。本当はエコリ様の言いつけを守りたいんだろう？」
「守るのが使いの役目だ」
「やれやれ、相変わらず硬い奴だな。もっと自由に生きればいいのに…そんなことはどうでもいいか。」
「月為どうしたんだよ！ここは一発ドカンとやってやんなさいよ！」
「……」
　彼は黙って周囲をちらちら気配っていた。
　もしかして、人を気にしているのかも…そうか、過去にしろま先輩の故郷で起こした事件、あれから月為は変わりつつあるのだとしたら、ここでド派手な攻撃をかませるはずがない。
「どうしよう…」
「この状況からすると使いを説得するのが手っ取り早いかな。あとはエコリ様を呼んできて説得してもらう、チャラ男をひっぱたくっていうのもあるけど時間がかかるね」
　三番目は葉陽なら朝飯前なのではないかと感じたが、殴られそうだったので口には出さなかった。
「説得するにしても十分の間にあれだけできるんですか？」
「ここで光術の出番だよ」
　彼女は月為の方に振り向いた。
「まずは人間を守らないと！それくらいならできるでしょ？」
　彼は渋っていたが決心がついたのか線路の先を見つめた。
　そしてさっと左手を前に出すと何やら低い声で唱えた。
　ホームが切れる辺りに白い霧がたちこめてきたかと思うと、瞬く間に当たり一辺を覆い尽くしてしまった。
「すごい霧…」
「これで電車はしばらく入って来られない」
「使いには無害だがな…」
　月為は魔穴と周囲の使いたちを見回した。
「こいつらをなんとかしなきゃ」
「せめてこの半分の人数だったら…どこかに閉じ込めておければ…」
「閉じ込めておくもの…」
　はっと私達は顔を見合わせた。
「あの人型収納が使えるな」
「ってことはここに持ってこんと」
　私はポケットから携帯を取り出し、しろま先輩にかけた。
「もしもし？事情はあとで説明するのでヒトボンを玄関まで持ってきてもらえませんか？」
「今どこにいるの？持って行くよ」
　先輩は思ったよりも穏やかな口調だった。
「駅です。急いで行くので待っててください！」
「わかった。用意しとくからね」
　先輩に頼み終えた私は葉陽に言った。
「体になるものがあるかも。ちょっと行ってきます！」
「よっし、任せた！」

私は気合いを入れると階段を一段飛ばしで駆け下りた。

大通り沿いをか弱いオトメが全力で駆けていた。
五分ほどすると前方から台車を押してくる人物が見えた。
「先輩！」
「持ってきたよ～！」
しろま先輩は台車を押したまま右手を振ってこちらへ走って来ていた。
「ちょ～っと待ったあ！」
「えっ？」
どこからともなく現れたのは活発そうな野球少年だった。と思うとその姿はだんだん膨れてゆき、憎たらしそうなおっさんになった。
「あ、こないだのメタボおやじ！」
「ふふふ、これは仮の姿…その実態はっ！！」
肩に掛けていた赤いマントをヒラリと翻すと、ジャージにタンクトップ姿という三十代くらいのいかつい男の人に変身していた。
「メフィレス様が一番弟子ぃ、清高(きよたか)ぁっ！…俺のバランスどう？」
清高と名乗る人物は、両腕を曲げその逞しい筋肉を見せつけた。
（うわあ、暑苦しいの来た…）
私は絶句した。というよりも適当なコメントが見つからなかったと言った方が正確だった。
真冬だというのに寒い格好をしている上に、メフィレスの弟子というのが疑わしかった。
「そこっ！今笑ったな！お師匠様の邪魔をする者は何人足りともここを通すわけには行か…」
ゴロゴロゴロ…
「はい、確かに渡したよ」
「ありがとうございます」
清高の隣を抜けて先輩は台車を私の傍に置いた。
「なななな、何という術！」
彼はひどく困惑していた。どうやら自分が話している間は周りが見えていないらしい。
「こんな失態、お師匠様にバレたら…」
わなわなと震えていた彼は何かを思いついたようにポンと手をたたいた。そして、
「失礼！」
台車の上にあったヒトボンを抱え駅に向かって逃亡しはじめた。
「待てっ！！」
私は来た道を再び走り出した。
「ポチ！危ないよ！」
「大丈夫です！」
後ろを振り返る暇もなく私は清高を追った。

駅に向かうのかと思っていたら清高は途中で右折した。私もその後を追ってみると行き止まりで彼は狼狽えていたが、私に気付くとヒトボンを脇に置いて身構えた。
「もう逃げられへんよ！」
清高は気を緩めることなく私を睨んでいた。
殴り合いになったら勝てそうにない相手に喧嘩を売っても逆効果なので、ここは下手に出ることにした。
「それ返してもらえませんか？」
私はヒトボンを指差した。
清高は睨みを利かせたまま答えた。
「あかん」

「もともとうちの会社のものなんですけど…」
「うっ…」
　一瞬表情に戸惑いが見られた。ここは一気にたたみかけるか。
「売れ筋商品で、明日もそれ持って営業さんが取引先に行ってくれるんですけど、それがなかったら…」
「む、そうなのか？」
「はい。売上を左右する大切な取引なんです。もし上手くいかんだらどうなるんやろ…やっぱ、クビなんかなあ…結果出せやんだらそうなるもんなあ…」
　私はすすり泣きする真似をした。
「このご時世、再就職先探すのも難しいからなあ。毎日神頼みになるんやろなあ…神様！私が何したっていうんですか！ひどいひどいです！って」
　できるだけ感情こめて演技した。日頃の鬱憤でも晴らすかのように一言一句力を入れていた。
「そんな理由があるんなら仕方ない。持っていけ」
「ありがとうございます！」
　まんまと罠にかかった清高は身構えるのをやめた。私はパアッと明るい顔になると、ヒトボンを持ち上げた。
　清高は寂しそうに傍らに落ちていた石ころを蹴っていた。その哀愁漂う姿を見ていると、私は自分が悪人のように思えてきた。
　しかし迷っている暇はない。一刻も早くこれに葉陽の魂を入れて使いの能力を封じ込めないと。
　私が去ろうとすると清高が、
「あんたらはお師匠様を葬るつもりなのか？」
　と尋ねた。
「そんなことは…」
「頼むっ！それだけはせんといてくれ！」
　清高は石ころを強く蹴った。
　コツーンと行き止まりの壁に当たり跳ね返った。
「お師匠様は俺の恩人なんやっ！筋肉バカって言われていじめられてた俺に救いの手を差し伸べてくれた…だからあの人の力になろうと思った。お師匠様はナウでヤングな異端児に見えて、本当は優しくて強い方なんや。だから消すのだけは…」
（ナウでヤング？）
　数十年前の流行語に戸惑ったが、「今時の若者」とかの意味合いだろう。
「大丈夫」
　私は一旦ヒトボンを地面に置いた。彼はハッと頭をあげた。
「わたし達は、皆そのままでいられるようにしようって考えてるから」
　今はこれ以外言葉が見つからなかった。
「ううっ、すまねえ…あざーぁっす！」
　清高は体育会系のノリで九十度のお辞儀をした。
「さしでがましいけど俺もお供しやす」
「じゃあ急ごう！」
「おうっ！」
　すっかり意気投合した私達はヒトボンを背負って駅へ向かって走り出した。

　駅前は人だかりができていた。構内に立ちこめた霧が改札口にまで溢れ出ていたからだ。
「危険ですのでホームには入らないで下さい！」
　どさくさに紛れた私達は駅員さんの忠告を無視して改札口をすり抜け、ホームへの階段を駆け上った。
「こっちだ！」

深まる霧の中から月為の声がした。
彼は私達のところに駆けつけてきた。清高はいつの間にかいなくなっていた。
「はい、持ってきたよ、ヒトボン。葉陽は？」
「身体にいる。すぐに移すぞ」
私は彼の隣にヒトボンを置いた。彼が右腕を伸ばすとヒトボンがガタガタと揺れだした。
すくっ。
ヒトボンが立ち上がった。
「ううっ、重いっ！」
葉陽の声だった。
「寛いでいる暇はない。さっさと片付けるぞ！」
「わかってるわよ！」
「ええと、今の状況は？」
「使い達の攻撃を受けて光術でなんとかガードしてたところ。霧の維持とで月為はだいぶ体力消耗してるみたいだけど」
「ホシは？」
「行方不明…っていうかこの霧と多すぎる使い達でそれどころじゃないよ」
葉陽も疲れ気味だった。なんとか打開策を見出せないのか。
「ふきゅ〜…」
微かにサピョリスの鳴き声が聞こえた。私はパッと閃いた。
「もう一つ方法ある！サピョリスを捕まえるの！」
「それが出来てたら苦労しないよ〜」
「作戦思いついたよ」
「作戦？」
「振り子使うの。サピョリスそれに弱いんやろ？」
「まあ確かに」
「わたしやってみる。失敗を覚悟の上で」
「じゃあ私達は使いを追っ払ってくるから。行くよ、月為！」
月為は「気をつけろ」と言い渡すと葉陽とともに霧の奥深くに走っていった。

さて、まずは振り子なるものを用意しないと…生憎そう都合の良いものは持ち合わせていなかった。準備から前途多難な雰囲気が漂っていたが諦めてはいけない。
私は再び改札口まで戻った。
（あれは行里さん？）
間違いなかった。あの清いオーラは彼しかいなかった。
パン屋さんの制服姿も萌えるが、インディゴブルーのジーンズにパーカーというラフなスタイルにもそそられた。
こんな近くまで来ていたのか…と惚けている場合ではなかった。彼の提げていたトートバッグに、若い男の人がとても付けそうにない可愛らしいクマのキーチェーンがぶら下がっているのを発見した。
「すみません！」
「はい…あ、君はいつもウチに来てくれてる子だね。えっと、歩知ちゃん」
「そ、そうです！」
昇天まっしぐらになりそうだった。ポイントカードに名前を書いておいてよかった。
「あの、そのキーホルダーなんですけど、ちょっとお借りしてもいいですか？すぐに返しますので…」
「ああ、いいよ。…はい」
彼は何の躊躇いもなく私にクマさんを渡してくれた。
「妹にもらったんだ。どっかに付けて！ってうるさいもんだから」
彼は恥ずかしそうに目を細めた。

「優しいお兄さんなんですね」
「そんなことないよ。自分のために選んでくれたんだなって思ったら自然とね」
　私は心の中に熱いものがこみ上げてきた。この人を、この思いを絶対守らねば！という意思が私の尻に火をつけた。
　絶対サピョリス捕まえてやる！ふん！とやる気になった私は、
「じゃあまた後で」
　と彼と別れた。

　意外にも奴はすぐ目の前に現れた。
「ふきゅ～ふきゅ～」
　その愛らしい姿と鳴き声には「捕まえられるもんなら捕まえてごらんなさいな」と挑発しているかのようにも聞こえた。
　今日の私は昨日とは違う。ちょっとだけ。
　私は行里さんに借りたクマのキーホルダーをさっとサピョリスの目の前に出した。
「ふきゅっ？」
　サピョリスは耳を動かした。
「ほ～ら、クマさんが揺れますよ～」
　プラプラとゆっくりクマを揺らし始めた。サピョリスの両目もそれにつられて動いていた。
　私は動かす速度を更にアップさせた。
「ふっきゅうきゅう～！！」
　クマを追うサピョリスは首も動かして嬉しそうに鳴いていた。
（そろそろかな…）
「ふっきゅうう！！」
　かぷっ。
「よおし！もらったあっ！」
　クマに噛み付いたサピョリスを私は素早く右手で掴んで肩掛けバッグの中に押し込むと、素早くチャックを閉めた。
「ふきゅ～っ！ふきゅ～っ！」
　サピョリスはカバンの中で寂しそうに鳴いていた。
「こら！ふきゅふきゅ言うんじゃない！」
　私が叱りつけると鳴き声はぱっとやんだ。案外物分りはいいのかもしれない。
　一仕事終えた気分に浸っていると、誰かがこちらに近づいてくる気配がした。
（月為？葉陽？それとも…）
　霧の中から現れたのはメフィレスだった。
　彼はもぞもぞ動いているカバンを見やるとふっと笑った。
「よくやるねえ」
「渡さんよ」
　私はカバンをぎゅっと握り締めた。
「まあ、はっぴぃ運なんてはじめからどうでも良かったんだけどね」
「え…」
「周りを見てごらんよ」
　言われて周囲を見渡したが霧で殆ど何も見えなかった。
「見えないか…」
　彼は羽を広げた。構内を覆っていた霧はみるみるうちに晴れて人々の姿も露わになった。そこには人間を守ろうと防衛を続ける月為と葉陽、彼らを襲撃している使い達の姿があった。
「こんなのおかしい…」
「そう、おかしいんだ。運に気づいた君にならわかるはずだ。なぜ地上の似非エコがまかり通るのか」
　彼の声がだんだん私の耳の奥まで響いてきた。

エアコンの温度を下げたら温暖化って本当に防げるの？マイバッグを持てばゴミは減らせるの？日常の中のエコに関する疑問が沸々とわいてきた。
嘘だ。みんな知っている。本当は殆ど意味がないことだと。
でも、やらないとハミ子にされる。世間の目を気にしてるだけ。企業も環境保護を建前にすれば商品が売れる。
なぜ？どうしてそんなことをするのか？誰もそうやって疑わない。疑問に思ってもそういう世の中なんだと諦めている。人は知っているフリをしているだけで本当は何も知らないに等しいのに。それが良いことだと思い込んでいるだけに特に考えようともしない。
そんな人が溢れていると思うとぞっとした。
人は地球に悪いことをしてきた。だからやさしくしよう…悪いことをしてきた人の責任を私達がとるの？今更やさしくするの？それで地球を宥めているつもり？
「人は勝手にわいて出た生命体。それらが地球という星で仕様もないことで争い傷つけあい、地球にとってみれば迷惑極まりない存在だ。人間達が頂上の生き物という思考で環境保護を謳う限り、似非エコは止まらない。むしろ加速する。人が活動する限り環境破壊は進むんだ。資源が必要だから。どうやっても変えられない未来だから」
私は頭の中がおかしくなりそうだった。
「それを食い止めようとか軽々しく言う奴は馬鹿なんだよ。人の力は集まれば偉大なんて言うけれど大自然には為す術もない。だから自然に還るのが一番のエコだ」

すうっと意識が戻ってきた。
「人は内部分裂で滅ぶのかもしれない…」
一昨日彼から直接聞いた言葉を思い出した。
人が全て悪いわけじゃない。そういう人達と似非エコを推進する人と無関心な人とがごちゃごちゃになって揉めて更に地球に悪影響を及ぼすのだろう。
まだぼんやりとする頭に彼は話し続けた。
「もはや人間の力で解決できる問題じゃない。人間には少々辛抱してもらうほかない。わかるだろう？」
（そう、なん？）
私はぎゅっと目をつぶって考えた。思考を遮ろうとする何かを必死に振り払って。
難しく考えたらあかん。人は何のために誰かのためになっている？
（ううん。そんなことじゃない）
私はぱっと目を見開いた。
「違う！誰かの役に立ってるなんて思い込みや。役立たんだら存在価値がないの？ううん、そんなん違うよ。相手がどう思っていようが、その人が好きやから助けになりたい。
パン屋さんだってわたしが行里さんのこと好きやから毎日通ってる。ここには何の偽りもない。
人は非力でひ弱で愚かで自己中で…悪いとこ挙げたらキリがない生き物やけど、それは今更言っても仕方ないこと。当時の人達の選択が重なって発展してきた世界なんやから、わたし達が全て責任持てるわけじゃない。やから人間にとっちゃ、いきなり神様が来て「人間ウザイんで消えてもらいます」って言われたら、そんなのひどすぎる。
ポイ捨てとかしまくってる奴と物を大切にしてる人と全く同じにみなされていいの？そんなのいくら神様でも不公平すぎる！」
やっと何かをふっきれた。さっきの倦怠感はすっきりなくなっていた。
「ポチ！大丈夫！？」
葉陽が血相を変えて飛んできた。
「せっかく上手く説得できると思ってたのに…」
「説得？洗脳の間違いでしょ！」
彼女は怒り心頭に発していた。
「そんな顔してももう遅いよ」

メフィレスはふと前方を見やった。魔穴が数十分前に比べて二倍も広がっていた。
「こんな量入りきらない！」
「結局理解し合えなかったね。同じ使いのはずなのに」
慌てふためく葉陽に静かに呟いた彼の表情は物悲しげだった。
魔穴からは新たに使いらしき者達がわらわらとホームに向かって降りて来ていた。
「月為！一発ぶちかましてよ～！」
「そんな力は残っていない…」
こんな土壇場でも彼は冷静を保っていた、というより何かを決意したような瞳だった。
「ふふ…」
メフィレスは空を眺めていたがばっと羽を広げると線路上に飛び上がった。
「こうして全部消えればいい…全て失せろ」
その瞬間ビュワッと強風が吹いた。
「わあっ！」
吹き飛ばされそうになった私の背中を月為が支えてくれた。
「あ、ありがとう…」
彼は無言で頷いた。
「あれはヤバイよ。本気であたしらも消すつもりだよ」
「防ぐ方法は？」
「今の所ない」
月為があっさり答えた。
「ちょっとは考えてよ！」
「左右前方から攻められてそんな余裕はない」
彼は落ち着き払っていたが、使い達の距離は縮まるばかりだった。
倒しても倒しても生き返ってくるゾンビのように彼らには覇気がなかった。というよりも負のエネルギーしか感じられなかった。
メフィレスは私達を見下ろしていた。
「ここを巻き込んで自滅するつもりだ」
「ええっ！そんな超迷惑な！」
「あいつの気持ちはわからなくもない」
「月為…」
「あいつにとってこんな現実は許せないのだろう」
「そんなこと言ってても助からないよ。ここは踏ん張りどころだよ！」
葉陽は月為の背中をポンと押した。
「そうだな、耐えられるだけやってみるか」
彼はようやく少しだけやる気を見せた。
けれども根本的な解決策はまだ見つかっていなかった。
時間を稼げるのもあと何時間か何分かわからない。
（どうすれば…）
私は吹き付ける強風の中で必死に頭をフル回転させた。
（あ～！もうっ！何にも思い浮かばん！…あ、あれ？）
階段下から足音が聞こえてきた。また使いか？いやあれは行里さん！
なんと彼は一人でホームに向かって来ていた。
彼は私と目が合うと、
「そこは危ないよ！こっちに！」
と呼びかけた。その声に気づいた使い達が一斉に彼の方に向きを変えた。
（あかん！）
「ポチ！」
葉陽が止める前に私は彼の元へ走っていた。
そして彼の前に出て両腕を広げた。

「この人は関係ない！傷つけたら許さへん！」
　大声で叫びながら既に膝はガクガク手もぶるぶる震えていた。
「何の力もない人間に何ができるの？」
　女の使いが言い捨てた。
「弱いくせにでしゃばった真似ばかりして」
「自分達が救世主だとでも思ってるの？」
　使い達の不満と怒りが次々と浴びせられた。
「確かに人間は弱いし何の力もない。けど、今はそんなのどうだっていい。だって他の人のことまでよう知らんし、わたしごときが皆を助けられるとは思ってない。今はただこの人を守りたい、それだけや！」
　一瞬使い達の気が和らいだような気がした。
　おさまったかなと思ったのも束の間、ヒュッとメフィレスが降り立った。
「困るんだよ。言葉巧みに洗脳されると」
「そんなことしてない！」
　私は力強く意義を唱えたが、相手の威圧感に押しつぶされそうだった。
「仕方ない。この二人から消すか。君達は下がっててていいよ」
　使い達は彼の指示通り一斉に身を引いた。
　私は腕を下ろして彼と対峙した。
「名残惜しいけど許してね」
　彼の手の平からぼうっと光の玉が現れた。
「逃げて！」
　遠くで葉陽が叫んだ。
　逃げられない、いや、逃げるわけにはいかなかった。絶体絶命の大ピンチにも関わらず心が穏やかだったのは、彼の後ろに柔らかな光が差したからだった。
「エコリ様…」
「！」
　彼はその言葉に反応し躊躇いを見せたが構わず玉を投げた。
　当たったかと思うと、みるみるうちに私達をすっぽり覆えるほどの大きさにまで膨れ上がった。あまりの眩しさに私は目を瞑ったまま一歩も動けなかった。
　しばらくして目を開けると視界は真っ白だった。
　何もない世界というのはこういうことを言うのだろうか。
「誰かいる」
　そう口にしたのは後ろにいた行里さんだった。
　彼の指差した先には長い長い髪の毛の少女、エコリ様が佇んでいた。
　一面白の世界は次第にさまざまな色が混在する世界へと移り変わった。
　エコリ様の隣にはメフィレスが左肩を抑えたまま項垂れていた。
　彼女は私にニコリと微笑んだ。
「遅くなってごめんなさい」
「いえいえいえ…」
　私は畏縮した。
「エコリ様！ポチ！」
　葉陽と月為が駆けつけてきた。薄気味悪い笑みを浮かべた人形を目にしたエコリ様は驚いていた。
「葉陽、その姿は？」
「あっ、ポチの会社の製品なんですよ。収納人形っていって。今回大活躍してくれました！」
　彼女はえへんと胸を張った。正式には「人型収納ボックス」だと突っ込む気にはなれなかった。
「エコリ様には聞きたいことがありすぎます！なんでチャラ男に運を渡したんですか！？」
「運を取り戻してきてくれると言ってくれたから」

「でもそれは自分の計画のためです、エコリ様のためじゃありません」
　葉陽はまくし立てて喋っていたが、エコリ様はやんわりと制した。
「だいたいは察しがついていました。利用するだろうということを」
「じゃあなぜ！？」
「彼を信じたいと思ったからです」
　メフィレスの耳がぴくりと反応した。
「私達は地上の人間を見守る神です。しかし神だからといって全知全能ではないのです。感情がある限り差別も贔屓もする。人間と同じように結局は自分にとって利益になることしかしないの。統べる神はここにいる使い達と同じように人間が嫌いなんでしょうね。愛してきた自然を破壊され今になって偽環境保護を謳っている彼らが。
でも嫌いなのに抹殺できない。自然界の微妙なバランスを壊すわけにもいかないから。それに人間にはまだ利用価値があると思っている。少しだけですが希望を見出しているのでしょう。あまり好意は感じられませんが」
「じゃあ、人が完全に踏み外さない限り見守ってくれてるってことなんですね」
　彼女は神々しい笑顔で頷いた。
「メフィレスはこれからどうするのですか？」
　月為が彼に視線をやった。
「これだけやらかしたんだから追放でしょ、普通」
　葉陽がさも当然というように腕を組んだ。
　けれどもエコリ様は何も言わずに顔を伏せているメフィレスを真剣な眼差しで見つめていた。
「追放するならすればいい。いや、いっそのこと消された方がマシだ！」
　ばっと立ち上がった彼は涙目で拳を握り締めていた。
「どうせ天上界には不要な存在なんだから」
　バシッ！
「……！」
　刹那の出来事だった。
　エコリ様はメフィレスの頬をはたいた。彼女の表情は厳しかった。
「私はあなたに同情して迎え入れたとでも思っているの？」
　彼は黙って頷いた。
「それは違います」
　エコリ様は表情を引き締めた。
「私は使いになる前のあなたを見ていました。神や使いに何を言われても自分なりに生きようとしているあなたに惹かれたのです。あなたのとった行動は良くなかった。けれども、それを止めようとしてくれる使い達が少なくとも二人はいたのですよ」
　彼女は月為と葉陽を見やった。
「んまあ、類は友を見捨てないってことわざもあるからね」
「そんなものはない」
　葉陽の揶揄に月為が生真面目に返した。
「私の使い達はどうしてか、一癖ある者達ばかりね」
　彼女の表情は柔らく温かかった。
「手のかかる子ほど可愛いって言うでしょ？」
「言いますね」
　私も表情がゆるんだ。
「私はメフィも月為も葉陽も信じています。私の責任は重大だけど、三人がいてくれるから頑張れる。三人のうち誰か一人欠けてもだめ。それぞれの良いとこ悪いとこ全部ひっくるめて大好きなの」
「エコリ様…」
　メフィレスはぽろぽろと涙をこぼしていた。

「こんなことで泣かないの」
　エコリ様は彼をぎゅっと抱きしめた。彼女は慈愛に満ち溢れていた。
「あ～チャラ男が泣いてる～ぷぷっ！」
「…うるさい光合成」
　彼は涙を拭いながら葉陽に言い返した。
「さっきは手をあげてごめんなさい。暴力なんていけないことなのに」
　エコリ様がメフィレスに謝ると、
「チャラ男にはそれくらいがいいんですよ！愛のムチでシバいてやってください！」
　使いらしからぬ冗談を言ってのけた。
　エコリ様は上品に笑っていた。そして気を取り直してこう告げた。
「あなたの処分ですが、追放はしません」
「え…」
「その代わり、今後しばらくは地上へ降りないこと」
「そんなのまたどうにかして下りようと…」
「それは無理です」
　エコリ様はキッパリ言った。
「私の許可なしに地上へ下りることはできません」
「でも、今回…あ、もしかして」
「はい。だから私の責任でもあるのです」
「…申し訳ありません」
　メフィレスは静かに呟いた。
「犠牲者が出なくてよかった」
　エコリ様はほっとしていた。
　言われてみればそうだ。怪我はしても誰かが死ぬようなことはなかった。消そうと本気で思えばできたかもしれなかったのに。彼も使い達も神も心の底では人間を深く恨んではいなかったのかもしれない。
「お前はバカだ」
　月為は無表情のままメフィレスに言い放った。
「…君の方がバカだよ」
　二人の間には気まずい雰囲気が流れていた。しかしそれを破ったのは月為だった。
「だいたいお前は遊びすぎるんだ。もう少し真面目になれ」
「真面目？それは君みたいにカタブツになれってこと？お断りだね」
「使いとしての品位を損なう」
「品位を損なう？それは光合成に言うべき台詞だろう？あいつには品位のカケラもないよ」
「なんですってぇ！？」
　葉陽が食って掛かるようにメフィレスを見上げた。
「まあまあ、三人ともやめなさい」
　エコリ様が仲介に入ったが、月為は無愛想な面で、葉陽は不機嫌そうに地団駄を踏んでいたし、メフィレスはどこ吹く風みたいな様子だった。エコリ様がまるで三人の子を持つお母さんのようだった。
　何はともあれ駅もぶっ飛ばずに済んで本当に良かった。
「あの…」
「は、はいっ！？」
　いきなり呼び止められてビクッとしてしまった。振り返ると行里さんがバツの悪そうな顔をしていた。神様と使い達に気を取られすっかり忘れていた。
「さっきはどうもありがとう」
「あ、いいえ…」
　私はぶんぶんぶんと首を横に振った。
「お師匠さまぁ～っ！！」

いきなりマッチョ…ではなく清高が泣け叫びながら猛進してきた。彼はメフィレスの前まで来ると更に大声で泣いた。顔は涙でぐしゃぐしゃだった。
「キヨ…」
「俺、お役に立ててなくてすまないです…ひっく…でも、生きてくれてて良かったです、ひっく…」
彼はむせびながらもエコリ様の方に向いた。
「エコリ様！お師匠様を助けてくれて本当にありがとうございます！月為さんも！葉陽さんも！あと、そこの方も！」
「そこの方」の私は丁寧にお辞儀された。
「キヨ、もう良いよ。わかったから」
メフィレスは清高の肩をポンポンと叩いた。そして、
「お前には感謝してる」
と優しく言葉をかけた。
「お師匠様…」
清高は再び溢れ出てきそうな涙をぐっと堪えていた。
傍らで眺めていた葉陽がつまらなさそうにため息をついた。
「あ〜あ、男同士のナントカってムサイね」
呆れた顔をしていたがその眼差しは優しかった。
一件落着したところで私はあることを思い出した。
「そうや！」
せっかくなのでここで行里さんにクッキーを渡しておこう。
左腕に提げていたカバンのチャックを開いた。
「あ〜っ！」
悲痛な叫びにその場にいた全員が私に注目した。
「ふきゅ…」
カバンの中にはポコンと膨れたお腹で無防備にも仰向けになってコロンと眠っているサピョリスの姿があった。その傍らには食い尽くされたクッキーの残骸が散らばっていた。
（そうか、すぐに泣き止んだのはエサを見つけたからか）
私はこの惨状を行里さんに見せるわけにもいかずアハハと誤魔化した。
「どうしたの？」
「ええっと…クッキー作ってきたんですけど、食べられてしまったみたいで」
その証拠に眠っているサピョリスをつまみあげた。
「猫？可愛いね」
彼はそっと触れると優しく撫でた。
「ふきゅう〜」
サピョリスは気持ちよさそうに欠伸をするとぱちりと目を開けた。円らな瞳で行里さんを捉えたらしい。
「ふきゅう、ふきゅう〜！」
彼のほっぺたに頬をすり寄せていた。
「あはは、くすぐったいよ」
サピョリスに抱いた殺意も、小動物と戯れる彼を前にしては煙のごとく消えてしまった。
がっかりして散乱したカバン内をもう一度覗き、クッキーが入っていた透明袋を取り出した。袋の中には一枚だけ綺麗な形のクッキーが残っていた。
「それもらえないかな？」
「え？でも、サピョリスが食い散らかしたのやし…」
「いいんだ」
私は彼に言われるまま袋を渡した。彼は袋からハート型のクッキーを掴み取ると口の中へ入れた。
緊張しながら彼の反応を待っていると、

「美味しいよ」
　彼は顔を綻ばせた。
「ありがとうございます！」
　（作って良かった…！）
　私の心は春の陽気に包まれた花畑に変わった。
「また作ってほしいな」
「はい…！」
　照れ臭い気持ちを隠し密かに喜んでいると、
「さて、事件も解決したし帰ろっか」
　葉陽がぐーっと伸びをした。彼女はいつの間にかヒトボンから抜け出ていた。
「そうですね。皆一緒に戻りましょう。メフィあなたもですよ」
　エコリ様は先に行こうとしていたメフィレスに声をかけた。
「集団行動を乱すなんてまーだまだ半人前だよ」
　葉陽は後ろから彼をからかった。すると彼は振り向いて、
「いちいち突っかかるなんてまだまだ子供だね」
　と言い返した。

「なぁにぃ〜っ！このバカ男（おとこ）！」

　葉陽はメフィレスに殴りにかかったが、彼はひらりとかわした。
「こら！逃げるな！」
「逃げなかったら殴られるじゃないか。大切な顔に傷がついたらどうするんだよ？」
「そうなったら変形でもなんでもして化けたらいいでしょ！」
「へえ〜使いなのに魔法を勧めるんだ」
　くくっと意地悪く笑うメフィレスに葉陽は一瞬たじろいだが、カッと目を見開いた。
「そんなこと言ってない！」
　勢いで通すのが彼女のやり方らしい。
「あのさ…」
　二人の観劇を眺めていた月為が急に口を開いた。
「何！？」
「私達は三人じゃないとだめなんだな」
　月為は二人を交互に見比べた。
「え？」
「三人いないとバランスがとれないということだ」
「はあ、まあ…うん」
　葉陽は拍子抜けした。
「光合成と一対一なんていつ消されてもおかしくない状況だからね」
　メフィレスはわざと葉陽をおちょくった。
「ふざけているとまた葉陽が黙っていないぞ」
「なあに言ってるんだよ。いくらあたしだって本気なわけないじゃない」
　葉陽は思いっきり笑った。月為はやれやれと首を横に振った。
「さて、本当に行きますよ」
　一部始終を見守っていたエコリ様は三人に手招きした。
「あれ？清高は？」
　葉陽は彼を探した。
「先に帰って行ったよ。トレーニングするからって」
「まだ筋肉つけるつもりなの！？」
「日課なのだろう」
「チャラ男の弟子にしてはしっかりしてるんだね。方向を間違えないといいけど」
「はは、光合成に言われたらおしまいだな」

二人の間にはまた一悶着起こりそうな渦が巻いていた。ここで仲裁に入る月為の役目はもう定番だった。
「使いもいろいろだ」
便利な四文字だったが、文字以上の深い意味が込められていた。

三人が和気藹藹と話しているのを楽しんでいると、「ポチ」とエコリ様に呼びかけられた。
「あなたには大変ご迷惑をおかけしました」
「いえ！無事におさまってよかったです」
神様に詫びられて私はあたふたした。
「あなたに運が渡ってよかった…私はずっと運がないと何もできないと思っていました。でもそれは違ったのです。運は既にあなたの一部で見えない力として上手く働いていました。大切に思う人を守りたい気持ち、それが人間の生命力だと信じることができました」
「ふきゅ〜」
サピョリスがエコリ様の肩に乗った。
「私にはもう運は必要ありません。あなたが持っていてください」
彼女は肩からサピョリスを下ろして両手で抱えた。
「でも、この力って…」
私が言いかけるとエコリ様はゆっくりと首を横に振った。
「心配ありません。あなたは運がなくても大切な人を想えるのですから…さあ、頭を下げてください」
「あ、え、はい…」
また猛烈な痛みを経験するのかと思うと気乗りしなかったが、断るわけにもいかずお辞儀するような格好で頭を下げた。
かぷっ。
（あれ？痛くない）
こないだとは一転して全く痛くなかった。ただ軽く挟まれただけの感じだった。
姿勢を戻すとエコリ様はサピョリスの頭を撫でていた。
「今度こそお別れです」
「お世話になりました」
「お世話になったのはこの子達の方ですよ」
エコリ様は使い三人を見やった。一癖二癖もある彼らをこれから導いていかなければならないのだろう。
ホームの端に光が差し込んでいた。
「ではまた会える日まで」
「ポチ、楽しかったよ！」
葉陽は両手を大きく振っていた。月為とメフィレスも穏やかに微笑んでいた。
彼らは光の中に入ると吸い込まれるように消えて行った。

「終わった…」
私は肩の力がすうっと抜けていった。長い五日間だった。
「お疲れ様って言っていいのかな」
行里さんが労ってくれた。
「はい、もうやり切った感じです」
私は今になって疲れがどっと出てきた。けれども彼が傍にいてくれる嬉しさの方が勝っていた。
彼はベンチに置いてあったヒトボンを右腕に抱えた。
「下まで行こうか」
「…はい」
その瞬間、彼の指が私の小指に触れると彼は私の手を取ってぎゅっと握ってくれた。私は

ドキッとして彼を見上げた。心なしかほっぺたが赤くなっていた。
「たまにはクロワッサン以外も食べてほしいな。バターロールも美味しいんだよ」
「いつも食べたいって思ってますよ。でも、毎日行くと…」
　私は返答に窮した。本当はクロワッサンが食べたくてパン屋さんに行っているわけではないことを正直に言えなかった。
「じゃあ一緒に入れてあげる」
「えっ？」
「袋に二つ。それならゴミも出ないでしょ？」
「あ…あははは」
　私は思わず声を出して笑ってしまった。
　なるほど。パンを一つ一つ包むビニール袋も懸念のうちだったかもしれない。
「じゃあお願いします」
「任せといて」
　彼はにこっと笑った。やっと心の平安が戻ってきた。
　改札口に着くと数分前まであった人だかりはすっかり消えて、いつも通りのこじんまりした駅を取り戻していた。
　行里さんは改札手前でピタリと足を止めた。
「ぼくは電車に乗るからここで」
「はい…どうもありがとうございました」
　彼からヒトボンを受け取った私はそれを両腕で抱えた。
「明日また会おう」
　その言葉の響きの心地良さに私は喜んで頷いた。
　改札口を出て横断歩道を渡る手前でもう一度後ろを振り返った。彼は柔和な眼差しで手を振ってくれた。

　雲の切れ間から太陽が顔を出すとその光は遠く彼方の空までも照らした。
　まるで一足早い春が訪れたかのように全てのものを包み込んでいた。

（完）

【あとがき】
　こないだ、昔書いた作品（『音そむる途』）を読み返していたところ、あとがきを読んでハッとしました。
「続きはきちんと考えてある」…この続き考えてないな、と。もう三年ほど前のことです。
　ちょうどそのときエコに関しての言い分みたいなメモがあったので、今回に生かせないかと思い出来たのがこの物語です。
　はじめはシンプルに進めようと思いながら書いていたのですが、登場予定のなかった人物が次々と増えて暴れるため、結局いつもとあまり変わらない分量になってしまいました。
　読み手にとってストーリー性は大事だけれど、おもしろくないと読みません（私の場合）
　でも、単なる「おはなし」ではなく、何らかのメッセージを含んだ作品じゃないと心に残らないものです。
　自分の伝えたいことを上手くまとめるのは本当に難しい。そんなとき想像の中のキャラクターたちが見事に代弁してくれる…それが物語を綴る大きな理由かもしれません。
　いつも物語を考えるときに、人間は最悪な生き物だという概念がありながらも、書いているうちになぜか完全な悪になりきれなくなってしまう。
　悪になってその人にどんな利益があるんやろう？とか深く考えすぎると、私の並みのアタマではもう処理しきれません。
「人間って最悪やな」と言いながら、まだ希望はある！と信じる願いのが強いんやろなあ。

最後に、今回のストーリーの発展は現在の職場からです。独りになった部屋で、繰り広げられる奇怪珍妙な物語を眠気が襲われたときには思い描いていました。（←仕事しろよ）
日常生活にはあらゆるところに話のタネが埋まっている。その一つ一つに想像を膨らませてみるのも結構楽しいもの。物語を作るのは文章力や表現力ではなく妄想力です！
でも、妄想しすぎて仕事怠けやんようにしやんと…

読んでいただきどうもありがとうございました。
またいつかお会いしましょう。

2010 年 1 月 20 日　初稿
2015 年 12 月 12 日　加筆修正